

## ■令和6年度 浜松市美術館評価

### 基本理念

「明日への希望を見出す美術館」  
誰もが気軽に立ち寄れる憩いの美術館であることで、美術との出会いの場を広げます。  
都市の拠点として国内外の優れた作品や地域ゆかりの作品の鑑賞の機会、人々の参加・交流により市民が心豊かになる美術館を目指します。

### 1 展覧会

優れた美術を鑑賞できる展覧会を開催し、来館者の裾野を広げます。

#### (1) 平常展(館蔵品展及び市展)

展覧会	開催期間	開催日数	観覧者数	目標	達成率	来館者満足度
小杉惣市コレクションの金銅仏 (五胡十六国時代～隋時代編)	R6.4.13-6.2 ※企画展同時開催	44日	6,815人	55,000人	77%	93%
小杉惣市コレクションの金銅仏 (隋時代～唐時代編)	R6.6.22-9.15 ※特別展同時開催	78日	19,531人			
北川民次のガラス絵とメキシコ土偶	R7.1.8-1.22 ※子ども市展同時開催	12日	11,274人			
	R7.2.22-3.26 ※市展同時開催	28日	4,811人			

※顧客満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

### 内部評価

取組内容	課題
<b>■小杉惣市コレクションの金銅仏</b> ・企画展や特別展と同時開催することで、金銅仏やガラス絵など多様なジャンルの作品に触れる機会を提供し、美術の普及及び館蔵コレクションの豊かさを周知した。 ・金銅仏は、作品に影響のない範囲で可能な限り展示室全体の照度を上げ、作品本来の色や形を鑑賞できるようにした。(白色LED)  <b>■北川民次のガラス絵とメキシコ土偶</b> ・静岡ゆかりの作家である北川民次のガラス絵6点と、メキシコ土偶5点を展示した。展示室には北川がガラス絵やメキシコ土偶について触れている文章をパネルにして設置し、作品理解につなげた。 ・メキシコ土偶は、恐らくこれまで展示されたことがなかったが、メキシコの風土を色濃く反映した北川作品と合わせて展示することで公開する機会を設けることができた。また、今回の調査で北川のガラス絵の元となった油彩画や挿絵をいくつか特定することができた。今後も館蔵品の調査研究を進めていきたい。	・館蔵品展を開催した第三展示室(小展示室)は奥まった位置にあり、来館者の動線から離れている。案内看板を目立つように設置したり、目録の展示図面に記すなど新しい試みをしたものの、気付かない来館者もいる。これまで以上にわかりやすい動線表示と丁寧なアナウンスに努めたい。 ・7000点以上ある館蔵品のうち、展覧会や作品貸出等で活用される作品はごく一部である。今後は活用機会の少ない作品についても調査研究を進め、館蔵品の周知、ひいては浜松市の文化レベルの向上に寄与していきたい。

### 外部評価

評価する点	改善点	事務局(回答)
佐藤委員) 貴重な金銅仏を間近に見ることは極めて秀逸。 メキシコ土偶とメキシコの色を表現したガラス絵画の対比融合展示は秀逸な組み合わせで、こうした属性の展示を今後もたくさん行ってほしい。	収蔵作品の公開なのか、仏像彫刻、価値のある絵画を公開して見て頂きたいのか、コンセプトが重複していることが多い気がする。元誰々のコレクションでしたといった運びで魅力を伝えることが出来るかも。中国の歴史と仏様の造形の見方など、研究者でなくても解るよう、美術的な観察方法を伝える手段を考えると良い。館蔵品に借用品を加えて、地元ゆかりの作家の展覧会など広げるとよい。	小展示室で企画展示をする際は、作品中心の展示なのか、あるいはコレクター中心の展示なのか意識的にすみ分けていく。令和6年度から中国金銅仏の調査研究を進め、今後はこの調査研究成果を展示に活用する。平常展を実施する第三展示室は狭いため、多くの作品を紹介することはできないが、コンセプトを工夫して検討していく。
箕委員) 収蔵作品の調査研究を進め、それを軸に展覧会を構成し展示を行うことは、来館する価値を作り出す一歩となると感じた。	7000点の館蔵品は、美術館での展示に限られているならば、市内周辺施設での展示の機会を作る、また研究調査プロジェクトを外部の研究員と立ち上げるなどの可能性を検討してほしい。	作品状態や温湿度管理等の問題を考慮しつつ、館外での展示についても検討する。館蔵品を活用できるプロジェクト等あらゆる方策を思案する。

伊藤委員) 照明改善により作品本来の魅力を引き出した点を評価する。北川民次のガラス絵とメキシコ土偶を関連づけて公開し、未展示作品の調査研究と活用を進めた点を評価する。	館内案内の多様化（デジタルサイン、音声ガイド連動、展示間のストーリーテリング強化）による動線の改善が求められる。	館内案内のデジタル化、音声ガイドへの取組など動線の改善を検討する。
伊内委員) 気軽に鑑賞できる美術館を今後も目指して貰いたい。	小杉金銅仏展は一日平均で約100人増加している。顧客満足度は93%と好評価で良かった。	金銅仏展は、その会期中に同時開催する企画展・特別展の影響が大きいと考えられる。
石上委員) 小ぢんまりとした第三展示室は、テーマを掘り下げて独自性豊かな展示をするのにふさわしく、工夫によって魅力的な空間になり得る場所と思われる。	第三展示室の認知度が低い。引き続き努力を続けていただきたい。	動線の表示、受付での声掛け、SNSでの事前周知等で周知を継続する。
今田委員) 静岡ゆかりの作家である北川民次のガラス絵の展示がよかった。北川のガラス絵についての研究が進みうれしく思う。		
鈴木委員) 作品により展示方法が工夫されていて、美術品の良さをわかっているからこそその配慮は素晴らしいと感じた。	作品、館蔵品の調査研究を進めている過程やすごさをアピールできる展示方法も良い。長文は読みにくい方のために、見出しなど興味を引くものにしていくことも方法の1つだと感じる。	来館者目線によるキャプションの文章の簡略化は各展覧会で可能な限り取り入れていく。

展覧会	開催期間	開催日数	観覧者数	目標	達成率	来館者満足度
第72回市展	R7.2.22-3.26	28日	4,811	5,000人	87%	89%

※顧客満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

#### 《取組内容》

部門	R5応募	R6応募	うち入賞者	
絵画	油絵	84	市長大賞1	奨励賞14
	水彩	59		
	日本画	23		
	その他	24		
	小計	184		
写真	70	71	大賞1	奨励賞4
彫刻	6	9		奨励賞2
工芸	25	23	大賞1	奨励賞2
書	31	23	大賞1	奨励賞2
合計	316	316	4	24

#### 《審査員》

絵画	石黒賢一郎	広島市立大学芸術学部准教授
	遠藤 彰子	武蔵野美術大学油絵学科名誉教授
彫刻・工芸	山本 一樹	静岡文化芸術大学名誉教授
	田中 毅	彫刻家
書	広瀬 舟雲	武蔵野大学教育学部教授
写真	大森 克己	写真家

#### 《来館者アンケート結果》

アンケート項目	
住まい	市内77.1% 県西部4.2% 県中部0.0% 県東部1.0% 愛知県6.3% その他11.4%
年代	10代以下8.2% 20～30代15.5% 40～50代17.5% 60～70代49.5% 80代以上9.3%
来館頻度	1回目33.0% 2回目以上（1年以内）24.5% 2回目以上（1年ぶり以上）42.5%
展覧会情報の取得方法	ポスター23.1% 友人知人20.2% HP13.5% 広報はままつ8.7% X3.8% チラシ3.8% 年間カレンダー2.9% 新聞1.9% その他22.1% TV看板等0.0%
満足度	満足61.1% やや満足27.4% 普通6.3% やや不満4.1% 不満1.1%
スタッフ満足度	満足55.8% やや満足14.7% 普通27.4% やや不満2.1% 不満0.0%
展示理解に必要なもの	作品解説大表示34.1% ギャラリートーク13.6% 講演会11.4% 年表10.2% QRコード解説6.8% 音声ガイド5.7% その他18.2%

#### 内部評価

取組内容	課題
・入賞260点、入選28点、さらに各部門から大賞を1点選び、その中から市長大賞1点を決定した。 ・今回は絵画部門の志村菜美さん（高校3年生）の作品《まいご》が市長大賞に選ばれた。カラフルな色合いと毛糸の装飾、物語性のある画面が目を引き、来館者からも好評であった。 ・市展の趣旨である美術の創作と鑑賞を勧め、郷土の文化・芸術の向上を図る機会の提供に寄与することができた。	・入賞した260点すべてを展示したため、展示室がやや過密状態となった。 ・令和5年度と比較すると応募点数は横ばいのため、広報に力を入れる必要性がある。

## 外部評価

評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 浜松市美術館の役割を的確に行っている。	上位入選作品を市美術館で展示を行った後に秋野不矩美術館で展示するのはどうか。	市展の周知や出品者の意欲向上を念頭に、秋野不矩美術館指定管理者や受賞者との調整を検討する。
	荒川委員） 市展の評価基準や作品のめざす方向を公募要項にて公表すると良い。基準を設けることで、市展の郷土文化・芸術の底上げと、継続的な知的向上心につながる。	検討する。
算委員） 地元で知られている作家に審査を依頼して評価されること、また多くの点数を入選としたことは、市民の文化振興に非常に励みになると考えられる。		
伊藤委員） 歴史ある市展として、多様な部門から作品を募り、若手である高校生の作品が市長大賞に選ばれるなど、創作意欲の醸成と郷土文化の向上に寄与した点を評価する。	展示点数の見直しや部門別の入れ替え展示などを検討することが求められる。	全部門同時に展示することで、幅広い表現を一度に鑑賞できる機会となっている点も重要だと考える。より一層見やすい展示空間や市展の魅力発信に努めていく。
伊内委員） 市展への応募者を増やすようPRをお願いする。市展は非常に参考となり鑑賞して楽しい展覧会である。	審査員によりやや評価に差があるように思えた。数年は同じ審査員が良い。	審査員は、絵画は3年、その他部門は5年ごとに交代している。
石上委員） 誰もが気軽に立ち寄れる、参加・交流の拠点となるという美術館の基本理念に沿った展覧会であり、市の美術館としての役割を堅実に果たしていることが評価される。		
鈴木委員） 出展者の方にとって心待ちにしている市展となっていることが伝わってくる。多くの賞もあり意欲へとつながっている。	市展の来館者数の伸び悩みに関して、作品は多いのだが、幼・小など教育機関からも応募をかけてみてはどうか。	高校生以上を対象とした市展のほか、教育委員会主催の「子どもの市展」を開催しており、たくさんの応募をいただいている。

## (2)特別展(全国巡回展)

展覧会	開催期間	開催日数	観覧者数	目標	達成率	来館者満足度
7人のミューズ展—日本の切り絵—	R6.6.22-9.15	78日	19,508人	30,000人	65%	95%

※顧客満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

### ＜来館者アンケート結果＞

アンケート項目	
住まい	市内58.5% 県西部14.6% 県中部2.7% 県東部10.0% 愛知県3.7% その他10.5%
年代	10代以下27.1% 20～30代16.5% 40～50代30.3% 60～70代23.8% 80代以上2.3%
来館頻度	1回目32.7% 2回目以上（1年以内）40.0% 2回目以上（1年ぶり以上）27.3%
展覧会情報の取得方法	TVラジオ23.4% 友人知人13.1% HP12.7% ポスター11.5% X5.6% チラシ5.6% 新聞5.6% 広報はままつ4.4% 年間カレンダー2.4% その他15.7%
満足度	満足78.9% やや満足16.1% 普通2.3% やや不満1.8% 不満0.9%
スタッフ満足度	満足60.3% やや満足16.4% 普通19.6% やや不満2.3% 不満1.4%
展示理解に必要なもの	作品解説大表示26.9% 音声ガイド24.5% ギャラリートーク15.3% QRコード解説10.2% 講演会8.3% 年表7.9% その他6.9%

## 内部評価

取組内容	課題
<p>日本で活躍する女性切り絵作家である蒼山日菜、福井利佐、松原真紀、SouMa、柳沢京子、筑紫ゆうな、切り剣Masayoの7人の作品、計113点を一堂に会し、現代の多様な切り絵表現を紹介した。静岡県出身の福井氏に、本展に合わせ新作の制作を依頼した。完成した《浜松》は、浜松にちなんだモチーフがちりばめられた力強い作品となり、人気を博した。また、本作をメインビジュアルに使用することで、巡回展ながら当館の独自の試みを強調した。現存作家の展覧会である点を生かし、作家を講師に迎え多様な関連事業を実施した。ギャラリートーク5回、サイン会4回、ワークショップ2回を開催し、参加者数は計510人に及んだ。出品作家から直接、展示作品や切り絵の魅力を伝えることのできる貴重な機会となり、イベントには県外からの参加者も多くみられ好評を博した。切り絵は小中学校の授業で取り上げられることもあり、会期中には計17団体・669人の利用があった。また出前授業1回を行った。解説の際は対象に合わせてわかりやすい説明を心がけた。また取り上げる作家や作品を変え、参加者の興味関心を引き出すよう工夫をした。共催の静岡第一テレビを中心に、開幕前日の生中継をはじめテレビ取材7回、新聞記事7回、ラジオ出演1回、ネットニュース2回に取り上げられるなど広報にも注力した。</p>	<p>目標30,000人であったが来館者数が思うように伸びず苦戦した。要因としては、集客を見込んでいた夏休みの時期に記録的な猛暑や災害級の大雨に見舞われたことが考えられる。前売り券の販売枚数は大変好調であり、開幕当初は目標達成も見込まれたただけに残念な結果となった。夏休みの時期に開催する展覧会は、今後も異常気象による影響が少なからず予想されるが、引き続き積極的な広報に努めたい。</p>

## 外部評価

評価する点	改善点	事務局（回答）
<p>佐藤委員） 切り絵に照準を合わせたことが成功のポイント。作家の精緻さと個性が、切り絵という作品から感じる。子供の頃に制作した経験があったり、身近にある美術作品はやはり強い。一般的な経験に基づく作家の特別展は今後も望ましい。</p>	<p>夏場などは暑さのため外出頻度が少なく、小学生は普通にタブレットを使っていることから、今後はリモートに注力していくことが必要。</p>	<p>今後リモートでのイベント開催も検討する。同時に美術館で本物の作品に出会える機会を増やせるよう、イベントの実施時間等を検討する。</p>
<p>荒川委員） 「7人のミューズ」という狙いが明確なタイトルが魅力的。切り絵の圧倒的な仕事量と、その精緻な美しさを存分に見せてくれていた展示手法だった。「紙を切る行為」とそこからの展開や、過去の歴史的背景から理解を繋いでくれたら、現代の7人のミューズの立ち位置も理解しやすく、日本の切り絵の意味と輝きをもって鑑賞できる。何かにフォーカスした「ミューズ」シリーズや「7人」シリーズみたいなものが定期的に開催される特別展も面白そう。繊細な仕事やデザイン展開の作品の数々、日本人らしい美意識も十二分に感じられる、個人的にはもう一度振り返って観てみたい展覧会であった。</p>	<p>額の裏側にある爪2～4つが、作品正面から見えていて、不自然に感じた。もし裏側にあるはずの額の爪が見える作品だったのなら他と比べて明らかに特徴的なもので、解説が欲しかった。紙を切る行為の「切り絵」がバラバラにならなくて繋がっている紙であることがすごいことで、描かれるデザイン展開も知的思考を含み実は奥が深い。切り絵のデザインを「鑑賞者」と「作り手」の部分から読み解いた解説などがあっても面白い。</p>	<p>繊細な切り絵作品を2枚の透明なアクリルで挟み額装しているため、額の爪が表面から透けていた。作家に確認したところ、このまま展示することを希望された。解説パネルは巡回のものを使用した。今後は巡回展であっても追加で解説を執筆するなど、来館者の目線に立った展覧会づくりに注力する。</p>
<p>箕委員） 現存作家の作品展は、鑑賞者にとっても非常に身近に感じられ、またその利点を活かしてトークやワークショップなど関連イベントを数多く実施したことが非常に価値があった。</p>	<p>中学校で切り絵を題材に授業を行っている学校が多いが、展覧会で本物を見て実施することが定着すれば良かった。学校との連携が進めばと考える。</p>	<p>より多くの学校に団体鑑賞を利用していただけるよう周知に努める。</p>
<p>伊藤委員） 静岡県出身作家による新作《浜松》を制作・活用し、巡回展ながら地域独自の要素を付加した点、現存作家とのギャラリートークやワークショップなど多様な関連事業を通じて教育普及を積極的に展開した点を評価する。</p>	<p>夏休み期間における気象リスクを見越した集客戦略（オンライン参加型イベント、来館者層の分散化）の検討が必要である。</p>	<p>現存作家の展覧会である点を生かし、作家本人を招聘してのイベント開催した。今後は館内Wi-fiも整備し、気象リスクや遠方の方の要望にも対応できるオンライン参加型イベントを検討します。</p>
<p>伊内委員） 満足度は95%と非常に高い。1日250人の来館者ではあるが目標未達は残念。暑い時期が影響したと思う。</p>	<p>特殊な「切り絵」展覧会ということではさらなる宣伝で来館者は伸びたのではない。</p>	<p>さらなる広報展開を模索する。</p>
<p>石上委員） 巡回展のなかで、県ゆかり作家との協力により浜松の独自性を打ち出し、当地ならではの魅力を付加した点は大いに評価される。集客が目標に届かなかったとしても、高い満足度を示している点に注目したい。多様な関連事業を実施し、切り絵という比較的身近な技法を入口としながら、作家の創造性に触れる機会を提供している点に工夫が感じられる。</p>	<p>観覧者が伸び悩んだのは残念だが、酷暑が続く夏場の展覧会は全国的に集客に苦戦していると聞き及んでおり、やむを得ないことと思われる。広報による集客にも限界があり、割り切って考えざるを得ない。</p>	<p>当館は駐車場から坂道を上る必要があるため、夏場の日中の来館者が伸び悩む傾向にある。今後は夕方にイベントを設定するなどの工夫を検討する。</p>



今田委員) 切り絵の表現の素晴らしさに感心した。展示方法も工夫され、切り絵について関心を持つことができた。	現代アートの展示も是非積極的に取り入れてほしい。	これからも幅広いジャンルの展覧会を開催することで、市民が多様な表現に触れる機会を提供していく。
鈴木委員) 多くの方からの関心や興味のある内容だと感じる。方法もとても工夫されていて鑑賞やワークショップ、出前講座など体験もでき参加する方も体験したことさらに関心が広まった内容になっていると感じた。	夏休みに開催する展覧会は、親子で参加しやすいが、異常気象が影響したとを感じる。時期ごとに年齢層を分けての開催でも良い。それが伝わる広報も必要。	当館は駐車場から坂道を登る必要があるため、猛暑の時期は日中の来館に特に影響が出る。涼しくなる夕方にイベントを実施することを検討する。

### (3)企画展(当館学芸員による自主企画)

展覧会	開催期間	開催日数	観覧者数	目標	達成率	来館者満足度
浜松ゆかりの洋画展 ・ひっぱりだこ展	R6.4.13-6.2	44日	6,815人	15,000人	45%	92%
小杉惣市コレクション 名品でたどる東洋陶磁-小杉惣市の眼-	R6.10.12-12.15	56日	4,220人	10,000人	42%	95%

※顧客満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

《来館者アンケート結果》

アンケート項目	
住まい	市内74.3% 県西部10.6% 県中部3.2% 県東部4.6% 愛知県1.8% その他5.5%
年代	10代以下29.1% 20～30代15.4% 40～50代25.0% 60～70代29.1% 80代以上1.4%
来館頻度	1回目22.0% 2回目以上（1年以内）47.2% 2回目以上（1年ぶり以上）30.7%
展覧会情報の取得方法	HP16.0% 友人知人14.6% チラシ12.5% ポスター10.9% 新聞10.5% TVラジオ10.1% 広報はままつ4.7% X3.5% 年間カレンダー1.6% その他15.6%
満足度	満足66.7% やや満足25.6% 普通5.5% やや不満1.4% 不満0.8%
スタッフ満足度	満足60.1% やや満足18.8% 普通18.3% やや不満1.4% 不満1.4%
展示理解に必要なもの	音声ガイド22.5% 作品解説大表示20.3% ギャラリートーク19.4% QRコード解説11.9% 講演会9.7% 年表7.9% その他8.3%

### 内部評価

取組内容	課題
<b>■浜松ゆかりの洋画展</b> ・岸田劉生をはじめ、北蓮蔵、曾宮一念と、同時期の浜松ゆかりの洋画家の作品を一堂に展示した。館蔵品を中心としながらも、岐阜県美術館、静岡県立美術館、福島県立美術館、豊橋市美術博物館、上原美術館等、全国各地の美術館の協力を得て、各作家の画歴とその変遷を追った系統的な展示を実現することができた。 ・各作家の活躍の背景にある浜松の支援者（パトロン）との関係性を明らかにし、年表や関係図にまとめることができた点は、本展における調査研究の成果といえる。また、これまで不明であった北蓮蔵『竹内益三郎肖像』のモデルが当館来館者からの情報をきっかけに明らかになった。館蔵品の展示によって浜松の近代の絵画界の実態の一部が明らかになった点において、本展開催の意義は大きかったものと評価できる。	<b>■浜松ゆかりの洋画展</b> ・観覧者数は予想下回る結果となった。本展の目玉となる作家は岸田劉生であったが、3人の作家に焦点をあてたことで、劉生関連作品は3分の1程度で、館蔵品が中心のラインナップであったことも影響して、訴求力が乏しかったものと思われる。有名な麗子像を上原美術館から借用でき、広報のメインビジュアルに据えたものの、効果は限定的であった。一方で、学術的な調査研究の進展のためには、地元ゆかりの作家・作品を取り上げることが、地方の公立美術館の使命でもある。調査研究の進展と動員の確保の両立を図るための方策を探り続ける必要がある。
<b>■ひっぱりだこ展</b> ・過去10年間に浜松市美術館が全国・世界の美術館・博物館に貸し出した実績のある作品のみで展示を構成する初の企画であった。展示作品のジャンルは日本画、大津絵、浮世絵、ガラス絵、油彩、工芸とバラエティに富み、渡辺華山、歌川広重、月岡芳年、小出権重、オディロン・ルドン、池田学等、全国的知名度と人気の高い作家が名を連ねた。当館のコレクションの層の厚さや幅広さを改めて示すと同時に、全国・世界の美術館・博物館から借用を希望される優品を多数所有していることを改めて市民に広く示した。 ・教育普及活動を前提とした展示構成・展示順、空間づくりを心掛けたことで、十分なスペースを確保したうえで対話型鑑賞、教育的視点での学びの流れを意識した展示解説等を実施した。親子対話型鑑賞会や教員向け授業づくり研修会等を併せて実施した。教員向け授業づくり研修には、小・中学校、高等学校の教員、教育委員会職員や美術館教育普及担当者等の参加があった。	<b>■ひっぱりだこ展</b> ・著名作家を含む充実したラインナップであったが、観覧者増への効果は限定的であった。また、館蔵品は美術館のリピーターにとっては過去に鑑賞済みの作品であることが多く、観覧者が振るわない実情がある。今回はそういった意味で、同じ作品でも「ひっぱりだこ」という新しい切り口を提案した。今後も既成概念にとらわれない柔軟な切り口を考案し、館蔵品の価値や魅力を広く周知し続けていく必要がある。

外部評価

評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 地元ゆかりの画家の展示の際に、各地多数の美術館の協力を得られたことは、本当にすばらしい高評価になると思う。貸し出しの実績で、そこからの貸し出し作品の展示をするというアイデアが秀逸であると思う。	教科書に載っていて知っているから見てみたい！がとても大切。YouTubeなどのSNSなどを利用して、地元の美術家たちの魅力的な映像を制作し、周知し、そこから実際に見るリアルティーを感じられると、若い世代への趣向につながる。国内グローバルに考えた若い世代へ向けた発信と芸術家育成は重要。全国に向けた公募展を開催することはどうか。全国の公設美術館での公募は広報に絶大に貢献出来ると思う。	今後YouTubeやSNSを利用した宣伝に取り組んでいく。浜松では地元文化に貢献した作家や文化人が多く活躍している。郷土の偉人を紹介する教育普及を出前講座などで発信する。
荒川委員）まず「ひっぱりだこ展」というタイトル選びが非常に良い。	「ひっぱりだこ」展覧会名と「吸盤をもつたこ」がビジュアルデザインになっており、展示内容とのギャップが強く印象に残った。デザインはインパクトがあったが広報物なので、展覧会内容が伝わるよう企画内容重視のデザインにしたほうが良いように感じた。	企画内容とタイトルが結びつきながら、注目を集められるキャッチーなタイトルを考案する。
寛委員） 館蔵品を中心におきながら、じっくりと展示内容を練って展覧会の企画を行っている様子を感じられる。手堅い企画展を重ねていくことは市の美術館として使命を理解していると言える。	良い展示を行っても市民の来場が少ない。市民の芸術鑑賞に対する啓蒙を必要とするように感じる。これまで美術館に来館しなかった層に新しいアプローチの仕方によって浜松市美術館の館蔵品の良さを伝えていく必要がある。	地域の作家・作品、館蔵品、芸術作品の価値や魅力を紹介するのは地域美術館の使命である。様々な視点や切り口、展示構成の工夫を引き続き模索していく。
伊藤委員） 浜松ゆかりの洋画家の系譜を全国の美術館との協力を得て体系的に紹介し、パトロンとの関係性や未解明作品のモデルを解明するなど、地域美術史研究を一步進めた点を評価します。全国・世界に貸し出された優品を集め、コレクションの厚みと価値を再認識させるとともに、対話型鑑賞や教員向け研修など教育普及と連動させた展示構成を実現した点を評価する。	館蔵品主体で訴求力が限定され、動員面に課題があった。調査研究を主軸としつつも、目玉作品や関連イベントを通じた来館動機の創出が求められる。展示切り口の新鮮さはあったが、過去鑑賞済み作品が多いためリピーター以外への訴求が限定的であった。館蔵品に新たな物語性や体験価値を加え、幅広い層を惹きつける仕組みが必要。	7,000点を超える館蔵品を抱える当館にとって、その効果的な活用は永遠の命題であり、どの作品をどのような構成で展示するかを、日常の館蔵品の調査研究とあわせて探究し続けていく。さらに、幅広い層をひきつける企画広報についても検討する。
伊内委員） ひっぱりだこ展～何だろうと興味が惹かれる展覧会であった。ネームが面白く新しい新鮮な展覧会であった。	目標達成率は低かった。今後の課題。	館蔵品の活用、地域ゆかりの作家や作品、芸術作品に焦点をあてるのは、地域の美術館に課せられた使命である。企画の切り口や展示の見せ方の工夫、広報の工夫で来館者増を目指していきます。

<p>石上委員)</p> <p>調査研究に基づく浜松ゆかりの作家の顕彰は市立美術館の根幹をなす役割であり、たゆまぬ努力をされている点が評価される。コレクションの価値を、他館から請われて展覧会に出品するという、ある意味客観的な実績を通して紹介する試みに工夫がある。身近であるために逆に分かりづらくなっているコレクションの魅力について理解を促すこのやり方は、説得力のあるものと感じられた。教育普及を前提とした構成という点も思い切ったもので、必ずしも収益には結び付かないが、文化施設として重要な活動に真摯に取り組んでいる点が評価される。</p>	<p>浜松の文化活動の豊かさを知る、あるいは自分たちの市の美術館のコレクションの価値・魅力を知る、ということは、郷土への誇りや愛着に直結するものであり、公立施設が果たすべき役割そのものといえる。観覧者数だけでなく、潜在的な効果を適切に評価する仕組みが必要である。</p>	<p>来館者数の取組に対する評価設定を検討していく。</p>
<p>今田委員)</p> <p>浜松ゆかりの洋画家の作品を館蔵の柱としている本館にとって必要な展覧会だと思う。各作家の活躍の背景には浜松の支援者（パトロン）との関係性を明らかにし、年表や関係図にまとめることができた点は、本展における調査研究の成果といえ興味深くみることができた。</p>	<p>写真や映像等当時の浜松の様子を知ることができる資料を本庁や博物館と協力して収集することは重要。</p>	<p>今回の展覧会で新発見となった、岐阜県出身の洋画家・北連蔵と浜松との関係を解明した資料は、図書館所蔵の明治時代の新聞であった。今後も美術の研究を進める上で、博物館や図書館などが所蔵する写真や新聞、手紙を活用する。</p>
<p>鈴木委員)</p> <p>評価の内容から教育普及活動の実施の成果を感じる。ひっぱりだこの名称から興味をもち鑑賞する方もいるのでは。美術品の良さを知っていただくきっかけになったと評価する。</p>	<p>各校、団体から成果の声も美術品に触れた市民の声として広報していくのもよいのではと感じた。</p>	<p>広報に活用する取り組みについて、積極的に来館者の声を活用する。</p>

《来館者アンケート結果》

アンケート項目	
住まい	市内66.5% 県西部12.4% 県中部1.4% 県東部1.4% 愛知県9.6% その他8.7%
年代	10代以下10.9% 20～30代10.4% 40～50代35.3% 60～70代39.3% 80代以上4.1%
来館頻度	1回目25.9% 2回目以上（1年以内）38.9% 2回目以上（1年ぶり以上）35.2%
展覧会情報の取得方法	HP19.5% ポスター19.5% 友人知人14.9% チラシ12.0% 広報はままつ7.9% X5.4% 新聞5.4% TVラジオ2.1% 年間カレンダー1.7% その他11.6%
満足度	満足63.2% やや満足31.8% 普通3.2% やや不満1.8% 不満0.0%
スタッフ満足度	満足65.9% やや満足16.1% 普通16.1% やや不満1.4% 不満0.5%
展示理解に必要なもの	作品解説大表示26.1% 音声ガイド18.7% ギャラリートーク16.7% 講演会11.8% 年表11.3% QRコード解説8.5% その他6.9%

## 内部評価

取組内容	課題
<p>■名品でたどる東洋陶磁展</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小杉惣市コレクションは、浜松市出身の実業家小杉惣市氏が後半生をかけて蒐集した東洋美術のコレクションである。（約430点に及ぶ作品群は、陶磁器を筆頭に石仏や金銅仏など多岐の分野にわたる）氏の没後、ご遺族により当館に寄贈され、以降、内田コレクションと双璧を成す当館のコレクションの核として扱われてきた。</li> <li>・本展では、小杉惣市コレクションの中から東洋（中国、朝鮮）の陶磁器を展示した。当館のコレクションの核でありながら、約30年間研究の進んでいなかった東洋陶磁について、監修や協力の先生のご指導のもと最新の研究等を踏まえて情報を更新し、展示に還元することが出来た。</li> <li>・東洋陶磁に絞って展示をしたことで、ほとんど全ての陶磁器を一堂に展示することができた。さらに、氏が鑑賞陶磁の一環として中国と朝鮮の陶磁史の流れが概観できるよう体系的に蒐集されたことが改めて浮き彫りとなった。小杉惣市コレクションの中の陶磁器に焦点を当てるとともに、個別の作品研究も進めることができた。</li> <li>・小杉惣市コレクションは、氏が蒐集するにあたっての経緯や方針等が残されていない点が大変惜しまれるが、ご遺族の言葉を元に氏の生涯や人物像についてまとめ、作品の保存箱や付属品等も調査対象として作品の移動や蒐集経緯等を把握することで、現時点までの情報を集約することが出来た。</li> <li>・難解なお堅いイメージのある東洋陶磁の展覧会だが、幅広い年齢層に気軽に楽しんでもいただけるよう、造形の面白さに注目したシルエットクイズを作成した。</li> <li>・専門用語が多数ある陶磁器について、すべての作品名にルビを振ったり、用語解説を配布したりして、鑑賞の一助となるよう配慮した。</li> </ul>	<p>■名品でたどる東洋陶磁展</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観覧者数は目標を下回る結果となった。絵画作品の展覧会と比べ、陶磁器は馴染みがない、難しい、地味というイメージ等を払拭することができなかったようである。それは学校・団体の見学や鑑賞申込の少なさにも表れている。今後は親しみもってもらえるように、積極的に出前講座を実施し、工芸品の魅力周知および美術の普及に努めていきたい。</li> <li>・美術館単独の開催ということで、TVCM等での広報が出来ず、周知面が不十分であった。</li> <li>・本展は、小杉惣市コレクションの「藍地白花金彩龍文瓶」など中国陶磁史における個別作品の重要性等を再認識したが、広報面で苦戦したため、メインビジュアルに据えた意図等が広く伝わらなかったように思われる。また、全体を通して、館蔵品のみの展示ということで広報面の訴求力に欠けてしまった。</li> <li>・館蔵作品の調査研究展示は、地方の公立美術館の使命の一つである。調査研究の進展と観覧者の確保の両立を図るための方策を探り続けていきたい。</li> </ul>

## 外部評価

評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） シルエットクイズを作成して、年齢層を広げるアイテムにしているところがすばらしい。	「陶磁のデザインがわかる！」のような鑑賞だけではなく、デザインという違う視点を与えて見てもらう。展覧会広報に陶磁器をご覧いただきたい場合は、小杉惣市コレクションをあまり出さず控える。先入観により東洋陶磁がボケてしまう。伝えたいことを一つに絞る。	工芸品である陶磁器をより身近に感じてもらえるよう、デザインという広い視点を取り入れていく。
	荒川委員） 大学の授業で陶芸は人気があり、ほぼ毎回定員超過で抽選になるが、浜松の地域性として歴史的に手作りや絵付け等、陶芸の魅力認知度は低く感じる。	陶磁器の魅力を広く発信できるよう、現代作家による多様な表現方法等の展示を含め検討する。
筧委員） これまで研究が進んでいなかった館蔵品について本展覧会を機に研究が進み、展示に結びつけることができた点について評価に値する。	市の独自企画であれば、1階部分を企画展示、2階部分を所蔵作品展にするなどのハイブリッドな展示も考えられる。	浜松ゆかりの洋画展、ひっぱりだこ展でハイブリットな展示をしたように、今後もさまざまな展示の方法を検討する。
伊藤委員） 長年進展していなかった小杉惣市コレクションの東洋陶磁について、専門家の監修を受け最新研究を反映しつつ、全作品にルビや用語解説を施すなど、専門性とわかりやすさの両立を図った点を高く評価する。	広報手段が限定的で、学校団体や一般層への訴求につながらなかった。出前授業や連携イベントなど、教育普及を軸とした来館動機の創出が求められる。	学校団体へのアプローチを強化し美術を身近に感じてもらう事で、将来に向けた来館者増につなげていく。



	伊内委員) 今後も幅広く広報を行い愛着を持ってもらうようPRを行ってもらいたい。	小杉惣市コレクションは浜松市が誇る貴重な財産であることを周知できるよう、個々の研究を進め、多様な展示で還元していく。
石上委員) コレクションの中の重要な一群について、外部の協力を仰ぎつつ調査研究を深め、その成果を公開し、還元できたことは大きな成果である。	コレクションの中の重要な一群について、今後その魅力と価値を広く認知してもらうための第一歩となる展示と思われ、集客面で苦戦はしたもの、継続性をもって発信することが大切と考える。	より広く深く作品の魅力を周知できるよう、継続して調査研究を進め、展示に還元していく。
鈴木委員) 幅広い年齢層に気軽に楽しんでもらえるように工夫した点や専門用語が多数ある陶磁器についてのルビ振りや、用語解説の配布は、鑑賞する方への思いが感じとれた。	誰もが親しめるよう、積極的に出前授業などを開催し、工芸品の魅力周知および美術の普及など努める姿勢に賛同する。広報面での苦戦はどの展示会においてもみなさんで考え取り組んでいることと思う。広報の方法の1つとして対象を分かりやすくするのもいいのでは。	対象を絞った広報物の作成についても検討する。

## 2 教育普及活動

市民の感性を育むため、美術に触れる機会と他者とのつながりを提供します。

### (1) 団体鑑賞

事業内容		参加者数、実績（人）	
学校や施設等の団体利用の受入れ		794人	
内部評価	成果	課題	
・「7人のミューズ展」では、小学校等16団体の鑑賞申込みがあり、計669人の来館者を受け入れることができた。切り絵は小学校の図画工作科の学習で活用できる技法であり、鑑賞希望が多かった。		・東洋陶磁展では、団体鑑賞の申し込みが3団体に止まった。陶磁器の展示ということで、学校の授業で取り扱われることの多い絵画や彫刻の展示に比べ、鑑賞の希望は伸び悩んだ。一方で小杉コレクションの陶磁器は、浜松市美術館の核となる重要な作品群であり、その魅力を広く周知する方法を検討し続ける必要がある。学校団体については、近隣の学校だけでなく遠方の学校の来館にもつながるよう、新たな切り口等を検討しながら積極的にアプローチしていきたい。	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員）内部評価の通り、「切り絵」の技法を、指導できたり、制作経験のある子供たちに見てもらえるのは強い印象と体験になる。その実践運用を続けてほしい。		子供達は鑑賞の理解が難しいので、見方、考え方を前もって提示し、見ながら教わったポイントと照らし合わせができるようにする。複数の歴史を含めると頭に入らない。広報で、鑑賞ポイントと照らし合わせながら理解ができる展示をすることを伝える。	事前学習での鑑賞ポイントの提示、実際の展示を前にポイントの確認を行うまでをセットで行い、美術に親しんでもらえるよう努力していきたい。広報においても鑑賞ポイントが伝えられるよう創意工夫する。
		荒川委員） 本学の授業で陶芸は人気があり、ほぼ毎回定員超過で抽選になるが、浜松の地域性として歴史的に手作りや絵付け等、陶芸の魅力認知度は低く感じる。	陶芸作品の魅力を発信出来るよう、取材に基づく作家目線での解説等も今後検討する。

<p>寛委員)</p> <p>教育普及活動は多くの展覧会において、団体を含む教育施設からの要請で鑑賞等の受け入れを行ったということは評価できる。</p>	<p>図画工作や美術・生活や社会などの教科内容との連携が図れるよう今後も学校現場へのアピールポイントを練って、情報を提供いただけたらと考える。</p>	<p>教科内容との連携について検討する。</p>
<p>伊藤委員)</p> <p>「7人のミューズ展」では、小学校を中心に16団体・669人の団体鑑賞を受け入れ、切り絵という学習題材を活かした教育連携を実現した点を評価する。</p>	<p>東洋陶磁展では団体鑑賞が伸び悩み、コレクションの魅力が教育現場に届かなかった。カリキュラムとの関連づけや体験型プログラムの導入、遠方学校へのアプローチ強化など、教育普及戦略の再設計が必要。</p>	<p>団体鑑賞では、ギャラリートークや対話型鑑賞などのメリットがあることを積極的に周知していく。遠方の学校については、出前授業を行うなどして日頃から美術に触れる機会を提供する。</p>
<p>伊内委員)</p> <p>「切り絵」は小学生に良い企画展だったと感じる。</p>	<p>今後、シニアへのアプローチも考えて。シニアクラブ等への宣伝が団体鑑賞につながるのではないかな。</p>	<p>出前講座の拡大等、シニア世代にも訴求できるイベントを継続的に企画する。</p>
<p>石上委員)</p> <p>利用者の関心の状況によって参加者数にばらつきがあるのはある程度やむを得ない。陶磁器は学校の授業で扱われることが少ないとしても、美術の重要な一分野であり、地元美術館に一大コレクションがあることを徐々に浸透させていくという長期的な取組みを続けていただきたい。</p>		
<p>今田委員)</p> <p>たくさんの子供たちが鑑賞することができうれしく思う。</p>		
<p>鈴木委員)</p> <p>教科の中で活用できる切り絵を取り入れたことが児童が鑑賞できる機会につながっている企画となっている。</p>	<p>多くの学校・団体が来館したいと思えるような発信の仕方を改善していく。</p>	<p>市教研修会、教育センター研修会、美術館教員研修会などにおいて教員に向けて周知します。</p>

## (2) ギャラリートーク

取組内容		参加者数、実績（人）	
学芸員・作家等による作品解説		449人	
内部評価	成果	課題	
<p>・7人のミューズでは、福井利佐氏、切り剣Masayo氏によるギャラリートークが講評であった。福井氏のギャラリートークは、サイン会とセットで開催することで動員につながった。切り剣氏のギャラリートークでは名前の由来でもあるけん玉のパフォーマンスを取り入れ、大いに盛り上がった。こうしたユニークベニユーの要素を取り入れたイベントを今後も考案していきたい。</p>		<p>・東洋陶磁展では、来館者の伸び悩みもあり、ギャラリートーク開催による訴求力も限定的となった。小杉コレクションの陶磁器は浜松市美術館の核となる重要な作品群である。その魅力を広く周知するためにも、事前の広報活動等の見直しを検討していく必要がある。</p>	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員)	展示作家作品と、何らかの関係を持つパフォーマンスでギャラリートークを盛り上げているのは、大変好感が持てる。	ギャラリートークは誰が誰のためにどんな内容を話すのか絞っていかないと興味を持てにくい。わかりやすい言葉を使い、十分な配慮が必要。美術館のユニークベニユーエレメントを積極的に広げるべき。秋野不矩美術館で行っている音楽演奏と芸術作品を関係付けできる作家・作品を採用するなど。	各展覧会で子供向け、家族連れに向け対象に応じたギャラリートークを行っているため継続していきたい。参加者の思いを満たすトークが実施できるよう、各担当者のさらなる工夫が必要である。ユニークベニユーについては、限られた予算内で実施できるイベントを検討していく。
荒川委員)	美術館を遠い存在と考える人が多い昨今において、現存の作家が関わる「楽しい美術館」の一つの提案としてこの路線を継続してほしいと言える作品解説・ギャラリートークが実施することは評価できる。	本学の授業で陶芸は人気があり、ほぼ毎回定員超過で抽選になるが、浜松の地域性として歴史的に手作りや絵付け等、陶芸の魅力認知度は低く感じる。	陶芸作品の魅力を発信出来るよう、取材に基づく作家目線での解説等も今後検討する。

寛委員) けん玉のパフォーマンスを行ったということで、美術以外の様々な文化との連携を行うことが、今後の美術館への新たな層へのアプローチとなる可能性を感じた。	陶磁器の魅力は立体でないと伝わらない部分もあるので、小学校に持ち出せるレプリカの作成も検討しても良いのでは。	本物とレプリカの違いを理解した上で、レプリカでも伝わる立体的な造形感触や体験が可能な作品については作成を検討していく。
伊藤委員) 美術館を従来型展示の場にとどめず、体験・交流の場として機能させた事例として評価する。	誰に向けてどのような訴求を行うかが明確でなく、イベントが一部の来館者に限定された印象を与えている。	バランスを考え、幅広い来館者に向けた事業を展開するよう努める。
伊内委員) けん玉パフォーマンスは盛り上がったと思う。	今後も笑いのある講演トークが必要である。	幅広い年齢層を想定し、多様な切り口でギャラリートークを行う。
石上委員) 現役作家の展覧会の強みを生かし、工夫してギャラリートークを開催した点、評価される。		
今田委員) 作家の話が聞けることは、大変有意義である。		
鈴木委員) 好評の企画は継続していただきたい。		

### (3) 講演会

取組内容		参加者数、実績（人）	
作家・専門家等による講演		118人	
内部評価	成果	課題	
・浜松ゆかりの洋画展では廣江泰孝氏（岐阜県美術館）と丸地加奈子氏（豊橋市美術博物館）、東洋陶磁展では、新井崇之市（町田市立博物館）と宮崎法子氏（実践女子大学名誉教授）による講演会をそれぞれ実施した。各展覧会のラインナップに沿った研究者の招聘により、展覧会を通じた最新の研究成果が、専門的知見から分かりやすく解説された。		・全ての講演会において、定員を下回った。講演会に関する広報は現状、チラシ裏面の一部、公式HP、公式SNSで行っているが、その情報が広く伝わっているとはいえない。また、今後はWifiの導入も含め、著作権等を考慮した上でインスタライブ等の生配信を行うなど、来館できない市民への情報公開も積極的に行っていきたい。	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員) 講演会の人選、公演内容のレベルも期待できる形で、興味が持てるものになっている。こうした講演会では応募される方々が当初から興味を持たれているため、レベルの高いものになっている。		SNSのカテゴリーでYou Tubeのアップ、活用を見たい。You TubeはブラウザのないTVなどでも視聴でき、TVCMと並んで身近になっている。	今後、多様な層の市民に訴求できるコンテンツを展示室からの動画生配信（インスタライブ）を実施する。引き続き行っていく。また、動画配信を契機に本物の作品を観に来ていただけるよう内容を工夫する。
寛委員) 各展覧会で専門家を招いた講演会を行い、丁寧にその研究成果を公表していることは成果と言える。		講演会を聞きたい層は、美術館のリピーターなどコアなファンになる。美術館友の会は難しくても、美術館イベントの定期的なメーリングの受信者をつくるなどLINE公式グループやメーリングリストの活用などを行うことも検討してほしい。	リピーター層獲得のための取組について検討する。

伊藤委員) 各展覧会に関連する研究者を招聘し、最新の研究成果を市民に分かりやすく伝える取り組みは、美術館の学術的価値を高め、地域の文化的知見の向上に貢献している。	伊藤委員) 現状の広報は紙媒体・公式HP・SNSに限られており、潜在的な参加層に十分届いていない可能性がある。ライブ配信やオンラインアーカイブ化など、来館が難しい層へのリーチ強化が必要である。	今後、多様な層の市民に訴求できるコンテンツを展示室からの動画生配信（インスタライブ）を実施する。また、動画配信を契機に本物の作品を観に来ていただけるよう内容を工夫する。
石上委員) 展覧会の内容に即した興味深い内容の講演会であり、企画力が生かされたものと考えられる。	石上委員) 講演内容は充実したものと思われるので、広く来館者以外にも対象を広げるのであれば需要はあるのではないか。	美術講演の聴講には入館料が必要となるため外部会場における開催を検討する。また、登壇者の許可があれば、インターネット配信も行っていく。
今田委員) 外部の研究者を講演に呼ぶことは、参加者にとって有意義ということだけでなく、専門家が浜松市美術館を意識することになり、今後協力を得ることができるという点においても大変意義深いものである。		

#### (4) 学芸員講座

取組内容		参加者数、実績（人）	
学芸員による館蔵品、地域ゆかりの作家・作品、文化財等に関する講座		138人	
内部評価	成果	課題	
・令和6年度から新規に開始した企画である。各学芸員が自身の専門分野や研究内容に応じて、開催中の展覧会の内容に縛られることなく講演するというもので、今年度は吉祥図、仏像、ガラス絵、絵本原画と、バラエティに富んだ内容で実施することができた。特に絵本原画の講座は、親子での参加を含め、参加者募集開始から早々に定員に達した。講座内容に興味をもって来館した市民が、全く異なる内容の展覧会を鑑賞する機会の創出にも一役を買っている。		・概ね好評を得た企画であったため、次年度以降も内容を変えて実施する。浜松市美術館には7000を超える館蔵品があり、市内ゆかりの作家や作品、文化財も様々である。幅広いジャンルの講座を企画したり、類似するテーマでの取り上げ方を工夫したりすることで、幅広い市民のニーズに応じていきたい。	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員) 学芸員講座は、参加者募集の段階で、授業として構えている可能性が功を奏していると思います、講座に携わる学芸員の方に期待致する。		講演の内容に、展覧会の内容に縛られることなく現代美術や現代彫刻、メディアアートも含めてほしい。	現代アートについて今後は学芸員講座で取り扱っていく予定である。
荒川委員) 素晴らしい視点の取り組みであると評価できる。			
寛委員) 学芸員の専門・研究分野について講演をもつのは展示会場に限りがあり、同時に幅広い展示がしにくいところであるが、講演会に来た市民が別ジャンルの展示を鑑賞するという、幅が広がることに非常に価値を感じる。			
伊藤委員) 各学芸員の専門性を活かし、展覧会に縛られない多様なテーマで講座を実施したことは、市民の新たな来館動機を生み出し、美術館への関心層を広げる効果があった。		館蔵品や市内ゆかりの作家・文化財をより積極的に取り入れ、講座テーマの体系化や継続性を高めることで、リピーターや新規層の掘り起こしにさらに繋げていくことが望まれる。	今後も学芸員の専門性を生かしながら、地域ゆかりの作家、作品、文化財を取り上げた講座を継続する。
伊内委員) 地道な活動ではあるが頑張っている。		これからも続けることが必要。	次年度も学芸員の専門性を生かしつつ、館蔵品、地域の作家、作品、文化財に焦点をあてて継続する。



石上委員) 新たな試みに反響があったことは、活性化につながり、今後の励みにもなることで喜ばしい。今後もぜひ継続、発展させていただきたい。		
今田委員) 学芸員講座を通じて、学芸員の力量と高めることができる。また、参加者から美術館でどんな展覧会を希望するかの動向をとらえることができる。	参加者にアンケートの協力をお願いしたい。	QRコードによるアンケートなどの実施を検討する。
鈴木委員) 学芸員の方の専門分野に知識は素晴らしいものだと感じている。知識を生かした講演会を評価すべき継続して行ってほしい。	学芸員の方の知識や思いが伝わる方法を協議会で出た意見を基に取り入れてみる展覧会も期待する。	学芸員の思いが伝わる講座の実施方法を検討する。

#### (5) ワークショップ

取組内容		参加者数、実績（人）
展覧会の内容に応じた表現・鑑賞の支援		106人
<b>内部評価</b>	成果	課題
<p>・「7人のミュージズ展」では出品作家が講師を務める切り絵のワークショップが好評を博した。東洋陶磁展では「土に親しむ！ミニ盆栽の器を作ろう」と題して作家の馬淵誠氏を講師に迎えた。また、「プラ板で陶磁型のオリジナルブローチを作ろう！」は当館学芸員が講師を務めた。いずれの企画も定員に達し、表現活動を通して楽しみながら展示作品に慣れ親しむことができた。</p>		<p>・ひっぱりだこ展では、対話型鑑賞のワークショップを開催したが、参加者は伸び悩んだ。対話型鑑賞は作品に描かれた対象に対して参加者同士が自由に発言し、対話しながら鑑賞を楽しむ試みであるが、その意図が伝わりづらかったのではないか。今後も同様の取り組みを継続予定で、情報周知の仕方を検討したい。</p>
<b>外部評価</b>	評価する点	改善点
佐藤委員) ワークショップ体験の効果は、美術の分野では絶大で、譲ることのないものがあると思う。講師の人選も大変だが、継続できるとすばらしいと思う。	不特定の参加者にとって、自由発言や対話コミュニケーションはハードルが高い。美術館に入る前から浜松城公園などを散歩し、美術館まで辿る散歩を含めた全行程をツアーにして、会場までの前振りの交流を作るのはどうか。	対話型鑑賞は、慣れてきた頃には活動が終わることがある。前段にアイスブレイクの活動を入れることも有効である。対話に加えワークショップのように簡単な表現活動を取り入れることも有効と思われるので、あらゆる方策を検討する。
荒川委員) ワークショップについて、五感を通じた演習教育が少なくなっている昨今、美術館の役割として大いに展開できる余地がある。都市圏の美術館でも体験型のワークショップは人気であり、実施の苦労は推察されるが、是非継続していただきたい。AI到来と同時に、一方で感性を磨いたりものづくりを発端にした「身体知能」が全国で強く見直されている風潮もある。来日外国人にもこのようなサービスが人気で日本を楽しく理解できると同様に、美術をより楽しく理解することで、文化力向上に貢献できる取り組みであることは推察できる。	対話型鑑賞自体はとても良い取り組みと感じる。同時に対話型鑑賞は参加者にも慣れが必要になってくる手法かと思われるので、楽しいと感じてもらえる工夫、リピーター参加者が増えるための工夫について考えてみたい。	対話型鑑賞という営みがまだまだ世間一般に理解されていないように感じている。知識を一方的に伝えるばかりではなく、探究的・意味生成的に自分なりの鑑賞をすることの楽しさや面白さ、その意味や価値について、活動の継続実施を通して伝えていく。
	算委員) 鑑賞できる展示と並行して来場者自身が手を動かして表現するとのできる造形ワークショップには大きなニーズがあると考えられる。今後も継続・拡張されることを願う。	今後も美術館ならではの質の高いワークショップを開催する。

伊藤委員) 作家や学芸員によるワークショップを通じて、来館者が表現活動を楽しみながら展示作品への理解を深める機会を創出した点は、美術館への親近感と参加意欲を高める取り組みとして高く評価できます。	対話型鑑賞ワークショップについては、意図や楽しみ方が十分に伝わらなかった可能性があるため、事前の広報や具体的な体験イメージの提示を工夫し、参加促進を図ることが求められる。	参加者募集のチラシやSNS発信の際、当日の様子や完成見本の写真を添付し、具体的な内容がイメージできるよう工夫する。
石上委員) 対話型鑑賞の面白さは伝わらない部分もあるが、コレクションに、また職員に親しみを持ってもらい、ファンを増やす意味でも重要な活動と思うので、地道に継続していただきたい。対話型鑑賞の実施人数として15名は少ないとは思わず、このあたりを適切人数と考えてじっくり取り組んでもよいのでは。		
	今田委員) 参加者にアンケートの協力をお願いしたい。	QRコードによるアンケートなどの実施を検討する。
鈴木委員) 体験できる楽しさがある。企画の好評からは是非今後も継続してほしい。	Youtubeでワークショップを行ってるところを発信していく。	今後youtubeやSNSでの動画配信も積極的に行っていく。

#### (6) 出前講座

取組内容		参加者数、実績（人）	
美術館の収蔵品や展覧会等に関する講座、出張授業等（※他団体等主催事業への参加含む）		723人	
内部評価	成果	課題	
・中学校での仏像講座、教員養成系大学での鑑賞教育に関する講演等、多様な依頼に対応することができた。仏像に関しては、展覧会は実施していないが、過去の展示実績から継続的に依頼をいただいている状況であり、今後も継続して取り組んでいきたい。		・美術館の利用とは、実際に美術館に訪れることだけを指すものではなく、こうした外部での講座参加等についても美術館利用の形の一つと捉えていく必要がある。	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 大学教員時に仏教仏像解説を授業で行った際に、宗教の強要ではないのか？と保護者にお叱りをいただいた事があった。宗教の遺構として仏像を考えるのではなく、子供たちには、純粋に芸術作品・彫刻としての美意識を持って歴史と芸術を観る目を養って欲しい。そうした見方の指導牽引役として教員のための講座は必要不可欠と考える。古いもの、あまり面白くないものと感じさせてしまう前に、「気づき」を持ってもらうための出前講座に大きく期待する。	芸術・美術の理解・発展に寄与することができるのは、社会構造の中の「美術館」だけである。強く続けていくことが重要。子供達が古物や仏像などを楽しく感じて鑑賞できるように、どうやって気づきを作るかが難問である。子供達だけでなく、美術や専門に関わる人々にも当てはまることと言えるかもしれない。社会文化全体に関わる事柄であるので、努力したい。	仏像に関する出前講座では、作品としての造形的なよさや美しさに着目するようにしている。多面的・多角的な鑑賞、他者との対話的な鑑賞を重視し、自分なりの見方や感じ方、新しい価値を生み出す鑑賞活動となるよう留意している。大人の展覧会の鑑賞活動にも有効と考えるので、一般のギャラリートークなどにも反映していく。	
寛委員） 美術館のアウトリーチ活動について、意義を感じている点を評価できる。	美術館に直接行けない人も多いと思われる。継続的に美術館の人材が外で啓蒙等の活動に関わってくださることを願う。	出前講座等の利用者も間接的な美術館利用者として捉え、活動を拡大していく。	
伊藤委員） 中学校や大学と連携し、仏像講座や鑑賞教育の講演など外部からの依頼に柔軟に対応したことで、美術館の専門性を地域教育に還元している点は高く評価できる。	外部講座の実施実績を美術館利用の一環として積極的に位置付け、来館促進とあわせて館外活動の価値を広く発信していく仕組みづくりが必要である。	出前講座の利用者は間接的な美術館利用として捉えていく。また活動の様子をSNSで発信し、講座依頼の増加につなげる。	

石上委員) 課題の記載内容に賛同する。若年層へのアプローチのほか、高齢化社会のなか実際の来館が難しい人々とのように接点を作っていくかは美術館の今後の課題であり、出前講座などは大きな可能性のある活動と考える。		
鈴木委員) 絵本講座など学芸員の方の専門分野の講座にぜひ参加したい。	出前講座の際、美術館の魅力をさらに伝えていただきたい。	出前講座の内容に限らず開催中の展覧会、開催予定の展覧会やイベントについて広報活動を行っていく。

**(7) 博物館実習、職場体験、教員研修など**

事業内容		参加者数、実績（人）	
実習・研修等（中学生の職場体験、大学生の博物館実習、教員研修等）の受入れ		71人	
内部評価	取組内容	課題	
	・博物館実習、インターンシップ、職場体験の受け入れ人数は前年と同程度である。ひっぱりだこ展で実施した「先生のための美術館講座」は、小中学校・高等学校の教員、教育委員会事務局等職員、美術館教育普及関係者の参加があり、実物の作品を前に教材開発のグループワークを実施した。3年目となる教員初任者研修の受入では、美術館教育普及活動の事例紹介、展示室内での対話型鑑賞の体験等、幅広い内容で実施できた。	・教員初任者研修の受け入れについて、教育センターより、この研修自体が令和6年度をもって終了するとの連絡があった。第4次教育総合計画に教育センターと美術館の研修における連携について明記したため、今後は相互の交流を含めた研修会の実施のあり方を検討していく。	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 特に小中高校の教員研修は今後違った形でも続けていって欲しい。これまでの実施実績はすばらしいと思われる。一般教育において、美術の視点から物事を考えることは、教育指導側として大変価値があり重要であると考えられる。	教員のための美術教育の補足を強く望む。芸術・美術の理解が、国の文化の基礎になるはずなのだが、特に国民の理解が、これまで立ち遅れている感が否めない。若い年齢層では、世界的な視野で観測すると牽引役となっている感触が出てきているのは嬉しい。子供たちのために、芸術が文化の礎となり美術館の役割は何より優先されると考えられる。		浜松市第4次教育総合計画において、教育センターと美術館による教員研修における連携を掲げている。経験者研修や図工・美術科の研修で当館の職員が関わり、美術鑑賞や美術館活用、その意義を伝達する。
箕委員） 教育委員会所属の学芸員を置く利点を活かして連携を行っている点が評価できる。美術館での研修が、教員が学校行事として団体で美術館を訪れる行動に結びつくような活動が行われていると良いと考えている。			
伊藤委員） 教員や教育関係者を対象とした研修や講座を通じて、美術館教育普及の実践機会を提供し、学校教育との連携を着実に進めている点は高く評価できる。	教員初任者研修の終了に伴い、教育センターとの連携を継続・発展させるための新たな研修枠組みやプログラムを検討する必要がある。		浜松市第4次教育総合計画に、教育センターと美術館の教員研修における連携を掲げている。経験者研修や図画工作・美術科研修に美術館職員が関わり美術鑑賞や活用について伝達する。
石上委員） 「先生のための美術館講座」は学校現場との連携も強化され、大変有益な取組みと考えられる。継続、発展させていただきたい。			

### 3 その他

様々な人に開かれた美術館とし、施設・設備の充実と健全運営を目指します。

#### (1)来館者アンケート ※洋画展、7人のミューズ展、小杉展、第72回市展にて実施

スタッフ対応満足度		施設満足度	施設に望むもの	
77%		77%	カフェ 36% レストラン 15% 常設展示室 14% 体験型シアター 14% 図書コーナー 13% デジタルシアター 8%	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）	
佐藤委員） アンケートはリアルに情報を収集できるので、実施は不可欠と考える。質問項目に誘導の無いように注意しながら続けてほしい。		アンケートは、昨今のSNS等と同様な注意が必要。情報の精度の問題である。運用の中後期段階で活用していくもので、最初の段階で一喜一憂は禁物である。	短期的な改善につながるものは速やかに対応し、長期的将来的な取り組みに対する分析も同時に行っていく。	
		荒川委員） アンケート回答率とアンケート回答年代がわかると、判断する情報としてより正確で、今後の美術館展開に活かせる。	年代別の傾向などをさらに分析を行っていく。	
箕委員） 多くのアンケート回答者に評価していただいている点が評価できる。		アンケート回答者は実際の来場者の中でどのような割合なのか、年齢・居住地などと比較してクロス集計をおこなって分析する必要があると考える。		
		伊藤委員） アンケートをとったイベントごとの満足度を比較するなど深掘りした分析により新たな課題が見えてくるかもしれない。		
伊内委員） 美術館職員は大変よくやっていると思います。今後も宜しくお願いいたします。		カフェの要望が多い。不満が23%～原因は。	キャプション文字の大きさや接客対応に課題があると認識している。不満の原因を分析し展覧会運営に活かしていきたい。	
		石上委員） 経年比較ができるとより有益であると思われる。	経年比較による検討も運営改善の材料にしていく。	
		今田委員） アンケートの取り方について検討していただきたい。	アンケート分析による内容の改善や回答率を上げる工夫を検討していく。	
		鈴木委員） 館外でのキッチンカー・地産地消のものでも地域に返る	検討する。	

※満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

#### (2)美術館設備

令和6年度に実施した修繕等	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・旗ポールロープ取替修繕</li> <li>・非常用照明取替修繕</li> <li>・加湿器修繕</li> <li>・消防設備修繕</li> <li>・手洗器水栓、和便器洗浄管修繕</li> <li>・空冷チラーユニット修繕</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加圧給水ポンプ水漏れ修繕</li> <li>・展示室硝子修繕</li> <li>・昇降機LED修繕</li> </ul>



外部評価	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 細部まで十分に修繕されている事が確認できる。	夏季気候の急激な変化に鑑み、空冷チャラーをはじめ空調システムの強化がのぞまれる。収蔵作品の保存性にも言及する。	定期的な点検を行いながら計画的に改善していく。
	寛委員） 美術館の機能、デザイン等、長く浜松市民に愛される美術館であるための指針等を今後じっくりと検討していく必要があると考えている。	今後、多方面の方々から広く意見をいただき検討する。
伊藤委員） 館内外の安全性・快適性を維持するため、幅広い設備の修繕を計画的に実施し、利用者と作品保護の両面で適切に対応している点は評価できる。	予算の兼ね合いだとは思いますが、修繕は主に対処的対応にとどまっているため、来館者が展示物をより楽しむための設備修繕もできるとよい。そのためには自主財源を確保する仕組みの導入を検討してはどうか。	展示物をより楽しむための設備修繕として、Wi-Fi環境を整えポケット学芸員の導入やインスタライブを実施する。
石上委員） 継続的な点検や修繕は安心して来館、鑑賞していただくための基礎的な業務であり、今後適切な対応が望まれる。		
	今田委員） 今年度の改修工事の概要を知りたい。	令和6年度の規模の大きな工事としては、12月から翌年3月まで外壁改修工事を実施する。そのほかは法定点検での指摘やトイレ等の不良個所の修繕を実施した。また、サービス向上に向けたWi-Fi工事や消費電力を抑えるLED化工事も実施した。
	鈴木委員） 浜松城公園を進み、初めに見える美術館が壁のため、壁画や入り口までの案内に小物を置いて進んでいくと入り口にたどり着いたなど、心わくわく空間がってもよい。	浜松城公園から美術館入口までの動線に、美術館に関する情報発信を行い楽しんでもらう工夫をする。

### (3) 展覧会等の情報発信

令和6年度に実施した広報活動等
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポスター掲示やチラシを配布したほか、展覧会共催者によるテレビCM等を活用した情報発信を行った。7人のミューズ展については、テレビCMによる広報の効果が大きかった一方で、洋画展と小杉展ではHPからの認知が大きく、より見やすい検索しやすいHP改良の必要性が感じられた。</li> <li>・ポスターのデザインを決める際には担当だけでなく全職員で見やすさやデザインの観点から決定した。</li> <li>・若年層を取り込むため、SNSを活用した情報拡散に取り組んだ。企画会社や作品の借用先と交渉し、来館者に作品撮影の機会を設けるようにしている。館内にはX（旧ツイッター）やFacebook、InstagramのQRコードを掲示して容易にアクセスしやすくしている。</li> <li>・若年層に興味をもってもらうようにSNS投稿は柔らかい表現で発信している。近年のフォロワー数の伸びは著しい。（参考：7/30 現在のフォロワー数9,620）</li> </ul>

外部評価	評価点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 共催者によるテレビCMは効果が高い。動画の効果は顕著で、今後の情報発信には欠かせない。		現在HPによる情報発信は、SNSなどから比較すると、一般論として効果が低くなってきている。若年層に興味を持ってもらうように、動画配信に移行していくことが強く望まれる。	民間人材を活用し、SNS等の知見のある方から動画配信のアドバイスをいただき実施している。今後は分析を行い次回展覧会に向けて対策する。
荒川委員） 紙媒体のほか、SNS発信からの利用者は将来的に期待できるため、今後も魅力的な発信を期待したい。		タイトル文字は、展覧会内容を連想させるよう、ある程度リンクしたデザインの方が良い。全くデザインなど無関係な素人の感想も的を得ていることもある。	企画内容とタイトルが結びつきながら、注目を集められるキャッチーなタイトルを考案する。

<p>寛委員)</p> <p>SNS等の発信について、忙しい中よく発信してくださっていると感じる。</p>	<p>先に述べたように、コアなファンを獲得するためには、定期的なメーリングやライン公式アカウント等での登録、登録者へのイベント情報発信などグルーブ的に取り込む方向性があればもっと市民に愛される美術館になるのでは。</p>	<p>ターゲット層を絞り効果的に動画配信を実施していく。</p>
<p>伊藤委員)</p> <p>学芸員のラジオ出演しているのを聴き、展覧会に対する思いが伝わった。今後も継続してほしい。</p>	<p>ポスターデザインも見やすいデザインですばらしいと思う。来場者の底上げを図るうえではポスターやフライヤーの配架場所などを見直してもよい。</p>	<p>今年度から大型ショッピング店や各区行政センターにおけるブース設置、近隣ホテルや飲食店などへのチラシ・ポスター配布、さらにコースターを配布し展覧会の周知に努めた。</p>
<p>石上委員) 若年層へのアプローチを的確に推進している点、評価される。</p>		
	<p>今田委員)</p> <p>他館のSNSでは、ミュージアムグッズの紹介が多数されている。浜松を題材にした作品を収集したので、グッズ販売を検討してほしい。本庁や博物館での販売も検討してほしい。</p>	<p>SNSでのグッズ紹介を含め、展覧会以外の魅力も余すところなく情報発信していきたい。</p>
<p>鈴木委員)</p> <p>情報発信の工夫が見られる。テレビでのコマーシャルでも内容に工夫があった。</p>	<p>インフルエンサーなど専門の方のアイデアをお聞きするのもよい。</p>	<p>ターゲット層を絞り効果的に動画配信を実施していく。</p>

## ■令和6年度 浜松市秋野不矩美術館評価

### 基本コンセプト

天竜二俣出身の日本画家で文化勲章を受賞した、秋野不矩の画業及び作品や関連資料を展示・保存・調査研究を通して全国に広く顕彰し、次世代に継承していく。

秋野不矩及び秋野不矩作品の一層の理解を図るため、特別展・所蔵品展を通して「『有為転変』変化してやまぬ創造の源」をコンセプトに、単なる知識伝達に偏らない多様な価値や多面的な作品理解を促す展示及び作品解説を行う。併せて、教育普及活動により地域住民の美術をはじめとする芸術文化振興を図る。

また、幼・小・中・高等学校等、地域の関係団体や企業、商店街等と連携し、浜松市内中心部や周辺地域から天竜区への来訪を促し地域振興へつなげる。

### 総評

展覧会事業では、本館のコンセプトや年度テーマ・展覧会テーマ等を意識した展覧会を実施できた。

所蔵品展では、人・もの・こととの縁によって移り変わり変化しながらも存在し続ける思いに焦点を当てた展示を行った。素描と本画を並べて展示したことで、作家の試行錯誤を視覚的に捉えられることができ、来館者が制作意図を理解するのに役立っていたことがアンケートから感じられた。

特別展では、不矩と関わりのあった現代作家や想定客層を絞った展覧会を企画し幅広い集客を試み、インスタレーションを取り入れた展示を行ったり家族層(特に子供)の来館を促す取組を行ったりした。また、館長や学芸員のギャラリートークを複数回行い、各展覧会の魅力を伝えた。更に子供向け鑑賞ワークシートの作成や展示作品の人気投票など来館者参加型の企画を行い、どれも充実した内容の展覧会となった。

地域への様々な取り組みとして、子供たちの校外学習、中堅教員研修、インターンシップ研修、高校生の社会体験研修等の受け入れや夏休み子供向けワークショップ開催、市民の創作活動の発表の場として企画展示室利用者支援、地域行事(やまもりアドベンチャースタンプラリー等)への協力等、教育普及や芸術文化振興等は前年度以上に増え、芸術文化振興に貢献できたと考えられる。

今後も地域や浜松市の文化振興の向上に貢献できるよう事業の充実を図っていく。

## 1 展覧会

優れた美術を鑑賞できる展覧会を開催し、来館者の裾野を広げます。

### (1)所蔵品展

展覧会	開催期間	開催日数	観覧者数	目標	達成率	顧客満足度
《有為転変》変化してやまぬ創造の源Ⅰ～流転～	R6.4.2～4.14	106日	6,823人	7,000人	97%	98%
《有為転変》変化してやまぬ創造の源Ⅱ～脈～	R6.7.2～7.21					
《有為転変》変化してやまぬ創造の源Ⅲ～在～	R6.10.5～11.17					
《有為転変》変化してやまぬ創造の源Ⅳ～理～	R6.12.3～R7.1.13					
《有為転変》変化してやまぬ創造の源Ⅴ～是空～	R7.3.25～3.31					

※顧客満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

### 内部評価

取組内容	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・所蔵品展では、5つのテーマから不矩作品の創造の源流を辿る展示を行い、不矩の画業をわかりやすく具体的に紹介する展示を行なった。</li> <li>・所蔵作品のキャプションは前年度に引き続き解説を拡充し、展覧会趣旨に沿って解説テキストを変更。複数回展示する作品には同じ表現で解説しないよう配慮し、リピーターにも満足感を提供できるよう対応した。</li> <li>・所蔵品展・特別展ともに、展覧会ごとに全出展作品の目録を制作。前年度に引き続き、所蔵品展では各回の企画やそのコンセプトをわかりやすく記載することにより、来館者に作品への理解を深めていただけたようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマを定めて秋野不矩の画業を多面的・多角的に見ていく手法はそれなりに効果があったと思われるが、秋野不矩の全てを網羅できているわけではない。このため、さらにテーマを拡げ、欧米美術の影響や多様な絵画団体での作家交流などについて幅広く研究し、芸術表現の潮流から秋野不矩作品を明確に位置付けていく必要性を感じる。</li> <li>・本画の劣化防止への配慮から、素描や絵本原画等の展示を工夫し、計画的に本画を休ませるなどの配慮を今後も継続していく。</li> </ul>

### 外部評価

評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 所蔵作品展に関しては、テーマを設定して既存の所蔵作品に、新鮮な視点と感動を与えることが一つの重要なポイント考えるが、とても上手いっている。	各作品の「流転」「脈」「在」「理」「是空」に対し、筆頭タイトルに副題的な簡単な説明があるとより良い。自己満足的にならないよう配慮と解説が必要。	所蔵品展のテーマについては、所蔵品展開催時に展示室内に年間テーマ及び各所蔵品展テーマの解説並びに出展作品計画などを紹介している。

<p>寛委員)</p> <p>秋野不矩の画業の中から毎回テーマを設定して館蔵作品の中からクローズアップする作品を設定して展覧会を行うのは作品展示可能期間も限られていると感じられる中、苦労もあると思われる。魅力的な展覧会を考えていて評価できる。</p>	<p>芸術表現の潮流からの展覧会テーマとして、創画会系・新制作系の絵画作家との比較や連携、またそういった作家を扱う他県の美術館との連携などがあっても良い。素材感やテーマに共通点を持つ現代アートなどとの展示など様々な展覧会の方向性も考えられる。</p>	<p>館内でも検討している事項。作品のテーマ性や主題の共通性から展覧会を構想したり、不矩の所属した団体の展覧会など少しずつ画業の核心に迫れるよう多角・多面的なアプローチを考えている。</p>
<p>伊藤委員)</p> <p>所蔵品展・特別展において、テーマ設定と解説の拡充により、秋野不矩作品の多面的な魅力をわかりやすく紹介し、リピーターにも配慮した展示を実現している点は高く評価できる。</p>		
<p>伊内委員)</p> <p>建築物にアートの趣。こじんまりとした美術館らしい小高い丘の上にあり天竜の眺めも良い。天竜の大きな観光資源である。</p>	<p>観覧が素足でできるので気持ちよく鑑賞ができる。観光協会、商工会等へのアプローチが必要。</p>	<p>観光協会や商店街などへのポスターを増やしたり、来館者への様々な情報提供をしたりする協力体制を整備している。</p>
<p>石上委員)</p> <p>作家個人名を冠した美術館として、作家に様々な角度から光を当て、作品の魅力を多面的に浮かび上がらせていくことは継続的なテーマであり、6年度も工夫して取り組んでいると評価できる。解説を拡充する、変化をつける等の取組みも美術館の魅力を増すために重要と考えられるので、継続していただきたい。</p>	<p>比較的近年制作されたものとはいえ、基本的に脆弱な素材が用いられる日本画作品であり、活用による劣化は避けられない。実験的な手法も多い作家であり、作品保存への配慮は活用とあわせて今後とりわけ重要な課題になると考える。</p>	<p>日本画の脆弱性に目を向けると展示期間や温湿度管理など十分な配慮が必要となる。このため、1か月程度のスパンで所蔵品展・特別展を実施しています。また展示には絵本原画や素描・下図など作家の試行錯誤を紹介しながら、本画を計画的に休ませるように工夫をしている。</p>
<p>今田委員)</p> <p>秋野作品を大切に研究が進んでいることを実感する展示である。</p>		
<p>鈴木委員)</p> <p>見せていただき、工夫されている点を感じとれた。落ち着いて館内の良さを感じながら鑑賞できる環境となっている。</p>	<p>課題で上げてくださっている内容に期待する。</p>	<p>秋野不矩の画業を顕彰できるよう調査研究を充実させながら、不矩のまなざした世界や画業を日本や欧米の芸術の潮流から位置づけられるようにしたい。芸術表現という観点から多様な展覧会事業の充実を図ってきたい。</p>

## (2) 特別展

展覧会	開催期間	開催日数	観覧者数	目標	達成率	顧客満足度
内田あぐり 汎 Fluxes	R6.4.27～6.23	51日	4,297人	5,500人	78%	77%
日本画☆動物園	R6.8.3～9.16	39日	9,407人	6,000人	157%	97%
秋野不矩と高畑郁子ーインドとの邂逅ー	R7.1.25～3.16	44日	4,092人	4,500人	91%	98%

※顧客満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合



## 内部評価

取組内容	課題
<p>①内田あぐり 汎 Fluxes</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代日本画を代表する作家の一人、内田あぐりが生命の躍動を描いた7メートルを超える大作や近作の数々、原点である人間像やドローイングのほか、当美術館周辺を取材した新作を展示した。</li> <li>・当館の特徴的な展示室空間を生かし、来館者に空間全体を作品として体感してもらうインスタレーション展示を行った。内田あぐり作品と不矩作品を配置・構成し、空間そのものを大きな作品として成り立たせ、作品と壁や床との一体感のある空間を来館者に堪能してもらうことができた。作家の関係者が多く訪れ、美術関係者からも好評を得た。</li> <li>・作家が展覧会の新作として、天竜区を流れる3つの河川をテーマとした作品や、阿多古地区の「阿多古和紙」に描いた作品を制作し展示した。</li> <li>・インスタレーションを記録するため、展示後に写真撮影を行い「図録」ではなく「記録集」の形で発行した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・展示内容について美術関係者からは好評を得たが、特別展開催を知らず不矩作品が目的で来館した方の中には、内田あぐり作品が好みに合わずアンケートに不満を記載する方もいた。2F展示室は開幕初日に開催したワークショップで制作した作品を展示したため、全体の展示作品数も少なかったこともあり、満足度が他の展覧会よりも大きく下がる結果となってしまった。</li> <li>・新たな試みを行い、当館としては今後の企画のためにも大変意義のある内容であった一方、一般の方には作品空間の魅力を十分に伝えることができなかった。会期を長くとっていたが、観覧者数も伸びなかった。</li> <li>・地元に関連した新作について、美術館周辺の地元の方へもっとPRできれば関心を持っていただけたかもしれない。</li> </ul>
<p>②日本画☆動物園</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の日本画家たちの視点で描かれた様々な動物たちが一堂に会する展覧会。動物を描いた作品を通して、かけがえのないのちを感じることができる展覧会となった。</li> <li>・これまで当館の利用が少なかった親子で楽しめる企画として開催したため、具象表現の動物作品で、いろいろな種類の動物が描かれた作品を選定して動物園感を演出した。また、動物園にいるように楽しんでもらうため、鑑賞しながら自由に会話をしてもらえよう館内に掲示を出したり、子供向けワークシートを配布したり、館内で作品の人気投票をしたりと、来館者が展覧会を楽しむ仕掛けを用意した。</li> <li>・秋野不矩作品以外の作品撮影が可能だったこともあり、インターネットや口コミでの評判から来館に繋がった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来館者数が予想を大きく上回ったため、チケットの増刷が必要となるなど、展覧会終盤まで対応に追われた。</li> <li>・満車のため駐車場に入れず、帰ってしまう車があったと報告を受けている。駐車場整理の人を手配できれば良いが、開催前から入場者数の予想は難しいため、手配ができなかった。</li> <li>・来館者が1日400人を超えると受付アルバイトだけでは足りず、事務室の職員も受付・売店・監視に出る必要があり、内部業務を進めることが難しかった（1日最大616人来館）。</li> </ul>
<p>③秋野不矩と高畑郁子 ― インドとの邂逅 ―</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インドをテーマに革新表現に挑んできた秋野不矩と高畑郁子。二人の画家がインドと出会うまでの作品、インドとの邂逅後それぞれの眼差しで描いたインド作品、さらに新しい日本画表現へと挑み続けた軌跡までを紹介。高畑の華麗な色彩表現と、不矩の生命のバイタリティを可視化する表現を通して、人間の本質を捉えた作品を紹介した。</li> <li>・豊橋市出身で令和4年度特別展で取り上げた中村正義に続き、豊橋市出身の高畑郁子を紹介。愛知方面からの来館者が多くみられた。</li> <li>・「インド」をタイトルに冠した展覧会で、不矩作品を目的とした来館者にも高畑作品との対比が好評であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来館者の満足度は高かったものの、冬の時期ということもあり来館者数が目標には届かなかった。満足いただけた方からさらにSNSなどで広めていただく工夫や仕掛けを考えていきたい。</li> </ul>

## 外部評価

評価する点	改善点	事務局（回答）
<p>佐藤委員）</p> <p>①一人の個性ある作家についての、日本画の深さや可能性に言及できている。こうした一作家の深淵に触れることは、とても良い評価ができる。</p> <p>②市民、来館者にとって理解しやすい、イメージの目測しやすい展覧の中でも「動物」は何より分かりやすく親しみがあり、子どもたちの注目を取ることができる。</p> <p>③アジアの文化を見定める中で、宗教や生き方の興味を強く感じさせてくれる「インド」は、好む市民の皆さんの来館を促すに充分である。モチーフの似ている秋野不矩と高畑郁子の対比を見せたことは、秀逸である。</p>	<p>日本画としては個性が強く表現が重い場合、開催に合わせて前もっての紹介や、テーマ設定の趣旨を公開しておく必要がある。絵画全体、日本画表現としての広がりや、幅を理解して体感していただくには必要なテーマ設定である。</p> <p>テーマは素晴らしいと思う。今後繰り返して開催する定番テーマにしていくと面白い。子供たちの長期休みに合わせて日本画による動物と季節の展開も想像できる。</p> <p>秋野不矩と、対する日本画家たちといった対称を示す企画ができると興味深い。このテーマに対して、各地の美術館からの積極的な収蔵作品借用も視野に入りたい。</p>	<p>インスタレーション等の現代美術的要素をもつ空間展示や作家の表現意図をダイレクトに伝える展示は、広報活動や解説など慎重に配慮し対応しています。秋野不矩の画業を振り返ると、美術館の役割や存在意義がそこにあるように思われ、不矩が大切にした魂と作家の思いを丁寧に説明する重要性を感じている。時期的なもの、家族層に絞った企画、主題のわかりやすい展示等、企画やコンセプトを明確にした展覧会を構想していきたい。横のつながりのある企画や作品比較を通して表現の違いに気付くなど、疑問や謎を解く部分も強化したい。他館や市美の収蔵品作品借用も検討していきたい。</p>

荒川委員) 「日本画☆動物園」のタイトルもさることながら、子供のためのワークシート内容の取り組みが大変素晴らしい。ワークシートの導き方は対話型鑑賞の片鱗もあり大人も一緒に楽しめたことは想像に難くない。 来場者目線と感性に寄り添うような展覧会の盛り上げ方の様々な工夫も評価できる。		
寛委員) 企画展示は地元の市民や秋野不矩のコアなファンに理解されるか難しい点もあるが、来館者数に過敏になるよりは様々な企画の挑戦の中で意義のある展示をすることが必要である。内田あぐりや、高畑郁子と秋野不矩の展覧会について、浜松市内で実施できた点について非常に価値があった。		
伊藤委員) インスタレーション展示は、展示室空間そのものを作品化し、新たな展示手法として高く評価できる。地元素材（阿多古和紙）や地域をテーマにした新作を制作して展示した点も地域性の発信に貢献している。	天竜区を流れる3つの河川をテーマにした作品を見た方が、実際に見に行きたいと思ったときの見どころや食のスポットなどを紹介するツールを観光協会と協力できると、地域の関係者は積極的に広報していただけるのかもしれない。	二俣商店街に協力いただき地域の飲食店について案内を準備中である。展示作品に関連する地域のスポットや秋野不矩ゆかりの地を紹介するなど、観光協会やまちづくり推進課とも連携し案内できるよう準備していきたい。
石上委員) ①秋野不矩とも接点のあった内田あぐりは、取り上げるべき重要な作家である。「今後の企画のためにも大変意義のある内容」との自己評価の内容を分析する。 ②親しみやすいテーマ設定と家族で楽しめる様々な仕掛けが功を奏して多くの来館者を迎えることができており評価される。 ③インドとの邂逅を軸に2人の作家の作品を比較しながら楽しめる好企画である。 3本の展覧会はそれぞれに特色のある企画で、全体の観覧者数は目標数値を上回っている。個々の展覧会の凸凹についてはある程度やむを得ないが、バランスの取れた企画展を組み立てた企画力を評価する。	①満足度が他と比較して大きく下がった点について、その要因を丁寧に分析し、次に生かしていただきたい。 ②来館者が予想を大きく上回ったことに起因する運営上の困難に対しては、言ってしまうと経験値の蓄積が最も有効と思われる。今回の課題と対応を丁寧に分析してほしい。	展覧会の質やギャラリートーク等の内容がよかった分、広報の発信エリアの拡大、どの客層にも分かりやすい解説など今後に生かせるよう配慮したい。地元の阿多古和紙を作品表現に活用していたので、地元商店街や区とも連携した働きかけも重視していきたいと思います。休日のスタッフの配置人数、役割分担の補助体制、駐車場案内等での課題を通常の展覧会へも当てはめ配慮するように改善を図っています。日々の運営へも有効に活かしていきたい。
今田委員) ②動物を描いた作品は、分かりやすく楽しい展覧会であった。初めて美術館を訪れた方も多かったと予想される。美術館に足を運ぶことの良さを実感したと思う。	入館者が多いため、鑑賞することによって不安を感じる方もいたと思うので対策を考えてほしい。	子供の来館が多い展覧会では、様々な配慮が必要になるが、今後、同様の表れが想定される展覧会時には、ニーズに対応できるよう配慮していきたい。
鈴木委員) 子供向けにも工夫されていて、ファミリー層で楽しめる企画であることを評価する。		

## 2 教育普及活動

市民の感性を育むため、美術に触れる機会と他者とのつながりを提供します。

### (1)団体鑑賞

事業内容		参加者数、実績
学校、地域の諸施設や、全国からの観光目的の団体来館・鑑賞を受け付ける。 希望する団体向けに秋野不矩の画業や人物像、藤森建築について理解を深める見学前ガイドを実施。		891人（39団体※見学前ガイド実施人数）
内部評価	取組内容	課題
・希望する団体には見学前ガイドを実施した(39団体891人) ・見学前のガイドにより、最初に秋野不矩や当館の建築について学び、見学する上でのポイントを知ることにより有意義な見学・鑑賞を提供できた。 ・藤森建築への興味をきっかけに訪れる団体には建築の紹介を多くするなど、来館者の興味に合わせて対応している。		・館内が狭くスペースがないため、入館前に屋外の広場にてガイドを実施しているが、天候によって館外での実施が困難となる場合がある。特に夏の時期は年々厳しくなる暑さにより外での解説が来館者の負担になる。10名程度までの少人数であれば館内でも可能だが、大人数の場合は難しく、屋外では特に高齢者には実施時間を短くするなど配慮が必要。

外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 展示作品と建築双方を見学できるのは、秋野不矩美術館の最大のメリット。今後も気候などの配慮をしながら続けてほしい。		今後は屋外解説などの実施は不可能と思われる。国交相も夏季の屋外の作業は休工する方針を検討している。夏の暑さは恒常的に尋常でなくなると考えられる。景観に問題が出るが、仮設などで日影を作るなどの対策が必要である。	その日の状況に応じて、熱中症対策が必要な場合は、屋外から屋内へ解説場所を移し対応している。
寛委員） 建築関係か展示内容など来館者の興味関心に合わせるなど、きめ細やかな対応について評価できる。		夏季対応として、館外入口近くに簡易テントを貼ったり霧のある扇風機を設置するなど、設備投資ができれば環境を改善できる。	酷暑対応を考え、その日の気温や湿度、時間帯によって屋外での解説を避け、館内での解説実施を行っている。
伊藤委員） 見学前ガイドを通じて、秋野不矩作品や藤森建築への理解を深める機会を提供し、来館者の興味に応じた柔軟な対応を行っている点は、鑑賞体験の質を高める取り組みとして評価できる。		屋外でのガイド実施が天候や高温の影響を受けるため、屋内で実施できる環境整備やデジタルツール（動画解説、QRコード）の導入が必要。	気温や湿度が高く熱中症の危険性があるときは、館内ガイドに切り替えて実施している。代替ガイドは予算の関係もあるので確認した上で検討していきたい。
伊内委員） 建築の素晴らしさを紹介できている。事前ガイドは必要な知識を持って鑑賞できるので理解が深まる。			広報については多様な声や魅力を多面的に紹介できるよう工夫していきたい。
石上委員） ソフト面の適切な対応は来館者の満足度向上に寄与するものであり、見学前ガイドの活用は評価される。工夫を続けていただきたい。			
		小学校の社会科で取り上げられている秋野さんを紹介するため、近隣の学校の団体利用を増やす。	二俣小は児童の利用・教員研修の利用があり、二俣幼稚園も利用がある。総合的な学習時間や図工美術の研修会等でも利用してもらえるよう積極的に各地区の教育機関に呼びかけを行っていきたい。
鈴木委員） 絵画を見たい方、建築を見たい方への説明はよいですね。		鈴木委員） 気候によって団体鑑賞が難しくなっていく。人数を限定していてもよいのでは。	2グループ編成でガイドを依頼されることもある。30名～40名の館内ガイドを希望する場合、搬入口等のスペースでガイドするように対応している。

## (2) ギャラリートーク

事業内容		参加者数、実績
展覧会担当学芸員や作家等が展示内容について解説する。 ・担当学芸員とゲスト学芸員による解説：秋野不矩と高畑郁子展 ・館長による解説：内田あぐり展、秋野不矩と高畑郁子展 ・作家等解説：内田あぐり展（3回実施）、日本画☆動物園（2回実施）		383人
内部評価	取組内容	課題
・展覧会に合わせて出品作家が直接語るギャラリートークを行った。作家から直接話を聞ける機会はとても貴重で、参加者が多く、参加者の熱意も高かった。		・第一展示室が細長いため、ギャラリートークで参加者が多い場合、ギャラリートークに参加せず作品鑑賞をしたい人の通路の確保が難しい。 ・足の悪い方は立ったまま、移動しながらのギャラリートークの終盤では辛そうな様子が見られることがある。

外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） トークの内容の全ては把握できないが、作家ご本人とテーマ展示に対して複数回のトークを開催できたことは秀逸である。		トークの日を設け、時間で展示空間をトークだけに限定する。その時間を知らない来館者には、原則トーク参加をお願いし、自由観覧を止めた方が、作家も落ち着いて話しやすいのではないか。その影響で来館数の減少が気になるが、ギャラリートークをSNSやYou Tubeの映像を配信することで広報にもつながり来館者増につながる。	ギャラリートークは、定員を限定せず開催日をお知らせしている。子ども、高齢者、障がい者など多様な鑑賞者のニーズに合わせた鑑賞事業も検討していきたい。トークに参加しない来館者は自由な鑑賞を妨げないよう配慮している。参加人数が多くなることが予想される場合は特に周知徹底し、動画配信は今後検討していきたい。
箕委員） 作家のギャラリートークが美術館で聞けるというのは貴重な機会である。現存作家の展示も取り入れた展覧会の醍醐味であると感じる。評価できる。		簡易スツールなど多くの美術館で足の悪い鑑賞者に対応するものが用意される場合がある。展覧会会場の幅の狭さから、美術品破損への危険性など難しいことも理解できる。正座用スツールなど低いものもあるが、検討が必要。	足の悪い鑑賞者への対応について、工夫改善の手立てを講じていきたい。
伊藤委員） 多様なギャラリートークを実施し、作家本人から直接話を聞ける貴重な機会を提供したことは、満足度向上と展覧会の価値向上に寄与している点で評価できる。		事前予約制・定員制の導入や、部分的な映像配信など、快適に参加できる環境整備が求められる。	事前予約や定員を定めた事業（対話型鑑賞）を実施を検討する。多様な鑑賞者のニーズに応えられるよう、今後も新たな試みを行う。
石上委員） 企画展ごとに講師を替えて実施しており、展示に即した内容を提供する意欲が感じられる。課題に書いているとおり、高齢者など実際の来館や長時間立ち続けることが難しい方々への対応は現代の美術館の課題で、よりよい手法について知恵を絞りたい。			
		鈴木委員） 期待し楽しみに来てくださる方への配慮と工夫を今後も期待する。	様々な形態のギャラリートークや来館者が主役となる対話型鑑賞等を充実していきたい。

### (3) ワークショップ

事業内容		参加者数、実績
<p>・「日本画ワークショップ」 内田あぐりによる小～高校生までを対象とした日本画の画材を使って描くワークショップ。絵の具の溶き方などを学び、大きな和紙に共同制作として表現した。</p> <p>・「子ども向けワークショップ～動物にいのちを吹き込もう～」 日本画家栗原幸彦による小中学生を対象とした動物を描くワークショップを実施。鳥などの剥製を観察しながら、動物(いのち)を描く楽しさを伝えた。</p> <p>会場：天竜壬生ホール会議室</p>		49人
内部評価	取組内容	課題
	<p>・「日本画ワークショップ」にて共同制作した作品は、ワークショップ会場として使用した当館2階展示室に会期中展示したほか、クリエート浜松(7/19～21：ハマツクリエイターズフェス)、浜松学芸高校(11/2～13：オープンキャンパス開催日とその前後)でも展示し、作品を多くの方にご覧いただくとともに当館について広く知っていただくことができた。</p> <p>・子供向けワークショップは進行速度が子供によって違うため、どの子でも取り組めるような簡単な内容のもの（今回はぬりえ）も事前に講師と話し合いながら決めている。そのため、参加者は時間内で楽しく取組むことができた。</p>	<p>・館内でワークショップを開催するための場所の確保が難しいため、夏のワークショップは毎回別の場所を有料で借りている。開催準備の負担が大きい。</p> <p>・子供向けのワークショップでも付き添いの大人が興味深く見ている。大人向けのワークショップも考えたいが、人員・予算ともに余裕が無い。</p>



外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 難しいワークショップにも挑戦していることは、大変秀逸である。子ども向けの夏休み対応などは、全国の美術館や芸術系大学などでもよく行われているので、秋野不矩での個性が出てくると思うので、すばらしい。		一般向け絵画ワークショップは、描写アレルギー（正確に物を描くこと）が強くあるため、絵を描くことへの劣等感などを取り払うことが必要になる。どこまで美術館が施すかにもよるが、ワークショップを行うことで、逆に参加者に描画アレルギーになってはならない。バランスが難しい。	ここ数年のワークショップでは、技能に特化したワークショップではなく、表現することの楽しさ・色の美しさや面白さ等、豊かな情操を育むことに寄与できる講師にお願いしている。
荒川委員） 古代より色彩を持つ粒によって描かれることの歴史の意味は深い、日本画ワークショップ開催は全国的にみても大変貴重な機会である。そのワークショップ開催にとどまらず巡回展を開催されたことも、その価値およびご尽力について非常に高く評価できる。			
寛委員） アウトリーチ活動として館外で積極的にワークショップを行っている点において、非常に評価できる。会場で展覧会の広報も積極的に行っていたらと願う。		大人も子供も年齢を問わず実施できる内容を検討しても良いのではないかと。	様々なワークショップを展開できればよいが、まずは未来に投資する意味でも子供向けのワークショップを充実させていきたいと考えている。
伊藤委員） 子どもを対象とした日本画ワークショップを通じて、作品制作の体験だけでなく、完成作品を複数会場で展示することで、美術館の魅力発信や認知拡大させた点が評価できる。		館内の開催環境整備や、外部施設と包括的連携を検討し、効率的に開催できる体制づくりが求められる。素晴らしい活動の持続化のために参加費値上げも検討しては。	館内に講座室が無く、展示スペースを縮小しなければ館内でのワークショップ開催が難しいため、外部施設を利用している。より効率的な体制づくりを整えていきたい。
石上委員） ワークショップだけでなく共同制作した作品の公開機会の確保も含めて内容を組み立てた点、評価できる。			
		鈴木委員） 人気のワークショップを継続してもらいたい、課題の改善は難しい。天竜区での開催とし、地元の方を取り込む形はできないか。	作家のワークショップや日本画ワークショップは人気が高いので継続していきたい。地域素材を生かした取組も展開できるように地域と繋がる努力をしていきたい。

#### (4)教育普及講演会

事業内容		参加者数、実績
出張講座、地区幼稚園での保護者向け講座、市内高校での出張授業を実施した。 ・出張講座 地域文化セミナー「天竜出身の画家 秋野不矩の絵と人生」 ・浜松市立光明幼稚園 家庭教育講座 ・浜松市立高等学校出張授業		34人
内部評価	取組内容	課題
	・秋野不矩の作品だけでなく人物についても解説する講座を行ったことで、より深く秋野不矩を理解してもらうことができた。講座参加者がその後の展覧会に来館し、美術館の広報にも繋がった。 ・美術を専攻する高校生に学芸員の仕事やキュレーションについて出張授業を行った。その後、高校生は紙面上で展覧会を組むなどし、作品制作だけではわからなかった美術館の役割や作品表現について学んだ。	・出張講座や出張授業は外部から依頼があれば対応するという形をとっているが、今後秋野不矩や当館について市民の認知度を上げていくためには、出張講座が開催可能であることを積極的に案内していくことも必要。



外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 高校生に学芸員の仕事や美術館にまつわる仕事を説明したことは素晴らしい。参加者に秋野不矩の作品だけでなく人物も理解することが、芸術表現全般への理解を深めていく。		浜松市美術館と、より深く連携をとって日本画だけではなく、芸術そのものの理解を促す取り組みをするべき。日本人の芸術に対する深さが物足りないところを、積極的に進めることも美術館の役割。	芸術の理解を促す取組については仰る通りで、秋野不矩自身も枠を超えた芸術をまなざしていたことを踏まえ、展覧会事業では本館の役割や存在意義を幅広く芸術表現を堪能できる企画も考えたい。
寛委員） 様々な内容の教育普及活動を行っている点で市民に愛される施設として認知される可能性がある。評価できる活動ではないか。		美術館が位置する地域の小中学校との連携も行うことができればなお良い。	職員のスケジュールや事業状況を勘案しながら、出向する機会を得られるよう周知していきたい。
伊藤委員） 出張講座参加者がその後展覧会へ来館するなど、教育活動と集客施策が連動している点は高く評価できる。		潜在的な需要層へリーチするために、市民・教育機関に出張講座の開催可能性を積極的に告知・提案する仕組みづくりが必要。	学芸員の他の業務に支障のない時期を調整しながら、出張講座の開催募集について、教育機関等への案内を今後検討していきたい。
		石上委員） 出張講座・授業は周知が行き届けば需要の高いプログラムと思われ効果も高い。一方で、職員の負担も大きく、現場の努力だけでなく体制面の整備も必要となる。	出張講座等については、業務との関係でバランスを保ちながら、地域のニーズに応えられるよう無理のない範囲で行えるよう配慮していければと考えている。
鈴木委員） 講演を傾聴された方から、とても良いと感想を聞いている。継続していただきたい。		口コミで広がっていくこともある。伝達方法の工夫が必要。	口コミで広がって来館者が増えていると感じる場面がある。来館者への声掛け・伝達方法の工夫の必要性を感じている。

#### (5) インターンシップ受入れ、教育プログラム受入れ

事業内容		参加者数、実績	
県内・近隣県大学の学生インターンシップの受入れ 職場体験・校外学習・教職員研修の教育プログラム等の受入れ		173人	
内部評価	取組内容	課題	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学生インターンシップ：2名</li> <li>・高校生職場体験：3名（天竜高校2年生）</li> <li>・校外学習：164名（3校）</li> <li>・教職員研修（中堅教諭等脂質向上研修）：4名</li> </ul> 学生の実習、教職員研修では美術館監視業務や受付補助業務等を通して、芸術文化に携わる仕事において大切にしていることを学んでもらい、当館について知ってもらうとともに教育活動に協力することができた。	・校外学習受入れ件数が3校と少ない。子供たちの来館は子供たち自身の学習だけでなく、その後の家族の来館にもつながる。来館希望の学校が増えるよう積極的に案内をしていきたい。鑑賞体験を深めてもらうため、見学前ガイドの他にも学習メニューを用意するなど工夫の余地がある。（子供向けギャラリートークやワークシートなど）	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） 美術館がインターンシップを行うことは、学生の学びとしての確である。		美術館を知り、美術館の仕事に繋げることは、社会や文化をどのような仕事をしていくにも芸術に携わる場からしか習得できない事柄を明確にし、深く伝えていくことができるのは美術館だけである。	インターンシップや教育プログラムの受け入れについては、現在と未来を繋ぐ重要な人材の育成であると考え、充実した取り組みが継続できるよう配慮していきたい。
寛委員） 教職員研修に組み込まれている点が評価できる。高校生・大学生など専門性の高さを求めている学生にも関心を持たれている。		美術館が位置する地域の小中学校との連携が増加すれば良いと感じる。ワークシートの開発・作成は現場の教員も喜ぶのではないかと。	近隣小中学校等への働きかけをこまめに行い、校外学習案内のチラシ等での案内するなど利用率を上げられる工夫を考えていきたい。

伊藤委員) 大学生インターンシップ、高校生職場体験、校外学習、教職員研修と幅広い層の受け入れを実施しており、教育的社会貢献として評価できる。	校外学習受け入れは年間3校にとどまっており、潜在的な需要に対して十分にリーチできていない。学校への積極的な情報発信が必要。同時に鑑賞体験をより深めるために、見学前ガイドに加え、子供向けギャラリートークやワークシートなど、参加型・対話型プログラムの開発といった学習体験の充実化も検討する必要がある。	市内の利用が増えるような広報をしていきたい。社会科教員や図工美術研修会、総合的な学習の時間での利用を促したい。所蔵品展や一部の特別展では子供向けワークシートを作成し始めています。児童生徒の団体利用があった際にもワークシートの活用や、子供向けギャラリートーク開催を検討していきたい。
石上委員) 長い目で見て美術、文化を支える人材を育成する重要な活動であり、今後とも継続して工夫をしていただきたい。		
	鈴木委員) 天候にもよるが庭での活動も視野に入れ教育活動ができるようになればよいと思う。(幼児から)	園によっては、虫を捕まえたりドングリを拾ったりして美術館敷地を工夫して利用している。

## (6)ミュージアムコンサート

事業内容		参加者数、実績	
作品を鑑賞しながら音楽を楽しむ館内ミニコンサート。 市内在住またはゆかりのある演奏家を起用して、新規層の来館を促進。 ・10/14 出演：巢立ひかり（ファゴット）、佐々木遥香（ハープ） ・1/12 出演：長瀬正典、柿本春香（リコーダー）		231人	
内部評価	取組内容	課題	
・当館展示室の響きの豊かさや不矩作品が創り出す空間で特別な時間をお楽しみいただくことができた。 ・R6年度は浜松市文化振興財団への寄付金も活用し1回追加し、計2回開催できた。コンサート来場者へのコンサートに関するアンケートも初めて実施した。アンケート回答者76件のうち半数が来館2回目以上で、その9割がコンサート目当てで来館。また初めて来館した方のうち65%もコンサート目当てで来館している。コンサート満足度は100%である。		コンサートへのファンが一定数おり、定着してきていると同時に、新規層の来館を促すという目的も果たしている。アンケートへのご意見も参考にしながら今後も継続していきたい。	
外部評価	評価する点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員) 美術館での音楽コンサートは今後も継続できる大切なファクターとなりえる。それができていることは素晴らしい。美術館でのコンサートはどうか？と言う意見もあることはわかるが、美術作品と音楽演奏は本来分割して考えるものではなく、芸術全体を身近な存在として考えることはできる。今後大変期待できるので、ぜひ続けて欲しい。		お客様のアンケートは大切であるが、アンケートに頼り過ぎないように注意すべきである。何か不具合や問題が起きた際に、アンケートに対する無意識な責任転嫁が起きてしまいがちになる。アンケートと同意時に、開催運営側のポリシーをしっかりと固めることが重要である。	様々な声を吸い上げるよう配慮しつつ、バランス感覚をもって対応していきたい。
寛委員) コンサートなど、美術以外の芸術文化との連携については、非常に良いと感じている。今後も継続していただけたらよいと感じる。			
伊藤委員) 来館者の約65%がコンサートを目的とした初来館者であり、美術館への新規誘引に大きく貢献している。		コンサート来館者を美術館展示や他の教育プログラムに誘導する仕組みがあるとよい。	コンサートのリピーターも増えつつあるので、他の事業へつなげられるよう裾野を広げる活動を検討していきたい。
伊内委員) 美術と音楽～素晴らしい。新しい顧客の発掘に寄与している。			
石上委員) 特別な空間でここでしか味わえない体験を提供しており、好循環を作り出した成功例として評価できる。			
今田委員) 大変素敵な企画である。			
鈴木委員) 高評価のため継続していただきたい。			

### 3 その他

様々な人に開かれた美術館とし、施設・設備の充実と健全運営を目指します。

#### (1) 来館者アンケート

スタッフ対応満足度	施設満足度	施設に望むもの
95%	97%	カフェコーナー55%、常設展示室23%、 図書コーナー14%、その他8%

※満足度は、来館者アンケートにおいて「満足」「やや満足」と回答した割合

#### (2) 美術館設備

市民ギャラリー貸出実績	令和6年度修繕の状況
<p>所蔵品展期間中のみ実施 令和6年度：11団体 利用率 R5年度：55.8%→R6年度：69.7% 利用者数 3,585人→4,968人 利用率昨年比13.9%増 利用者数は3割増 ホームページでの利用案内や空き状況表示が引き続き成果をあげている</p>	<p>指定管理者実施分 ・耐火金庫修繕 ・望矩楼銅板修繕 ・1F機械室煙感知器取替修繕 ・アプローチ坂木製手すり修繕 ・事務室空調機修繕</p> <p>浜松市実施分 ・駐車場陥没修繕 ・北側庇修繕 ・ブロック積杉板目隠修繕</p>

外部評価	評価点	改善点	事務局（回答）
	R5年度からR6年度の貸出利用率・利用者数の増加は素晴らしい。設備修繕は、特徴のある建築の外装修繕がきちんとされている。	H Pの利用案内や空き状況表示が、効果をあげている点は申し分ない。H Pのメイン画面は、より新規なところがあってもいいのでは。美術館の季節感や時刻の表現やドローンを使った画像で印象的な表現があっても良い。建築外装の修繕は、この美術館では大切と思われるので、今後も充実したい。	ご意見を参考にして、少しずつ取り組んでいきたい。外装の修繕については、浜松市・藤森照信氏と連絡を取り合って丁寧に行っていきたい。
	寛委員）貸し館利用の市民が増加している点について評価できる。		
	伊藤委員）利用率が前年比13.9%増、利用者数が約3割増と、市民利用促進の成果が表れている。	本館との満足度の差異を分析したらどうか。秋野不矩美術館の強みが再確認できるのでは。	一般来館の方の声を吸い上げられるよう、受付時にアンケートへの協力を呼び掛けるようにしていきたい。
	伊内委員）美術館の全体の雰囲気大変良い。		
	石上委員）貸出実績が伸びている点は評価される。誰もが安心安全に利用できることは公立施設の基礎的な要件であり、修繕について適切に進めていただきたい。		
	鈴木委員）建物が素晴らしくそこを目指す風景も良い。		

### (3) 展覧会等の情報発信

#### 令和6年度に実施した広報活動等

・美術関係誌へ展覧会情報掲載のほか、メディア取材・撮影は地元紙以外にも、全国紙、建築雑誌、イベントお出かけ情報誌など対応。

・特別展のプレスリリースを毎回作成し郵送・メールにて送付したことで、県内ラジオへの学芸員の出演依頼（K-MIX、静岡シティFM）や、NHK静岡（テレビ・ラジオ）での紹介、NHK日曜美術館アートシーンでの展覧会紹介の機会などメディア露出の機会が増加した。

・公式SNSを活用した情報発信（Instagram、X公式アカウント。財団の公式アカウントとも連携し発信）

フォロワー数も順調に増加（Instagram：R5年度末800→R6年度末1230、X：R5年度末333→R6年度末511）。イベント開催もSNSで告知しSNSを見ての来館も複数みられる。

・引き続き年間カレンダー、特別展案内を市内県内の公共施設、全国的美術館等へを発送し周知・来館を促進。財団発行の季刊誌で、展覧会開催情報掲載のほか、秋野不矩作品の解説を館長が執筆し掲載。アクトシティ友の会会員（約5000名）ほか市内外に配架。

外部評価	評価点	改善点	事務局（回答）
佐藤委員） メディアに繰り返しをした情報発信は素晴らしい。作家個人を記念する美術館は各地にあるが、秋野不矩に因む日本画家などの企画を進めていることは秀逸である。		YouTubeの積極的な発信と更新展開も可能だと思うので、制作を期待する。	検討する。
寛委員） 様々なメディアでの露出が増加し、秋野不矩の認知度も市民の中で高まることを願う。日本文教出版の小学校図画工作の教科書の美術館紹介のページに全国の特徴的な美術館と共に秋野不矩美術館が掲載されていた。地域の小学生にもぜひ誇りに思ってもらいたい。			
伊藤委員） 定期的な発信により、ラジオ出演やテレビ紹介につながるなど、情報発信の積極姿勢が成果を生んでいると感じる。		美術愛好者向けと観光客・家族層向けのメッセージを分けて発信することで、情報の受け手に合わせた効果的な広報が実現できる。	美術愛好者だけでなく観光客も訪れる観光施設でもある当館の強みを活かし、多様な発信方法を工夫していくことが大事。対象に合わせた効果的なメディアでの広報を今後も引き続き行っていきたい。
伊内委員） 秋野不矩美術館は自宅より近く今後行って見たいです。			
石上委員） 秋野不矩美術館は、建築もコレクション内容も際立った特色を持つ館であり、今後とも、展覧会および美術館そのものの魅力発信に取り組んでいただきたい。			
	鈴木委員） 地元の方と共に今後も期待します。		SNSやInstagram等の発信は効果的であるが、人から人への口伝えで来館される方が多く感じる。様々な情報発信を行いながら横につながるネットワークを工夫していきたい。